

アシネにおける後期青銅器時代IIIC期から 原幾何学文様期にかけての埋葬資料

高橋 裕子

Graves at Asine in Argolid, Greece, from the Late Helladic IIIC to the Protogeometric Periods

TAKAHASHI Yuko

The aim of this paper is twofold: first, to build a database of the graves at Asine in Argolid, Greece, from the Late Helladic IIIC to the Protogeometric periods; second, the analysis of the graves based on this database, delineating the characteristics of the cemeteries and the graves, burial customs etc. at Asine during these periods.

はじめに

ギリシアのアルゴリス地方のアシネは、青銅器時代においても初期鉄器時代においても注目すべき資料があまた出土している大遺跡である（図1）。アシネに関しては1920年代以来、一世紀にわたって多数の調査や研究が手がけられてきた¹。近年においてもその傾向は衰えを見せず、陸続と研究成果が発表されている²。最近の調査においては³、周辺地域でミケーネ時代の横穴墓が発掘され、後期青銅器時代IIIC期の土器が出土した事例も報告されている⁴。ミケーネ文化崩壊後のアシネ一帯の社会状況を考える上で、看過しえない資料であろう。

ところでアシネの勢力の変遷を見てみると、中期青銅器時代においては大規模な繁栄を謳歌したが、後期青銅器時代に入るとやや抑制された様相を呈するようになる。ミケーネ時代においてはミケーネやティリンス、ミデアには及ばない存在であったことは明らかである。ところがミケーネ文化崩壊後は状況が一転し、初期鉄器時代に入ると飛躍的に勢力を伸張させた。そして平野最大の集落アルゴスと覇権を競うようになっていく⁵。

このようにミケーネ文化崩壊直後から初期鉄器時代前半期は、アシネにとって重要な転換点となったと言える。そこで本稿においてはその時期に焦点を当て、埋葬資料を検討することとする。土器の編年区分では後期青銅器時代IIIC期、亜ミケーネ期、そして原幾何学文様期に該当する。なぜ埋葬資料を選択するのかと言うと、これら3つの時期を通時的に分析することが可能であり、なおかつ社会変動を分析する上で有益な資料であるからである。

埋葬資料の検討

筆者が確認しえた資料をまとめたものが、「アシネにおける後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての墓一覧」（「一覧」と略記）である。これをもとに、幾つかの特徴的な事柄について記していきたい。

1) 墓および埋葬の数

本稿の対象時期におけるアシネの墓数の趨成を要約すると、後期青銅器時代IIIC期にはある程度の数の資料が確認されるが、次の亜ミケーネ期はわずか1基のみに急落する。そしてその後の原幾何学文様期に一気に増加するという推移をたどる。以下、時期ごとに見ていこう。

後期青銅器時代IIIC期の使用が確認された墓は8基である。ただしすべてが複数の遺体を葬る横穴墓であるため、埋葬数はそれを上回る数となる。例えば墓域Iの1号墓においては当該期の遺骸が2体は埋葬されていた。他に墓域Iの5号墓では3体の遺骸が、また6号墓では5体がIIIC期ではないかと推測されている。さらに上記以外の墓においてもこの時期の遺骸が複数埋葬されていた可能性は否定できない。とすると埋葬数は墓の数の倍、もしくはそれ以上に達するとも推察されよう。

ところでアシネの横穴墓の大半から後期青銅器時代IIIC期以前の副葬品が発見されており、断続的ではあっても長期間使用されていたことが確認される⁶。すなわちこれらの墓はIIIC期に入って新しく造営されたものではなく、ミケーネ時代以来の横穴墓がミケーネ文化崩壊後もそのまま使用されたものである。通常このような場合は、例えばミケーネの集落の横穴墓群がそうであるように、ミケーネ時代の盛期であるIIIB期の遺物の方がIIIC期のものよりも多量に出土することが一般的である。しかしアシネの場合にはそれとは逆にIIIB期の遺物が少なく、IIIC期の方が多い⁷。これはアシネの横穴墓群の大きな特徴である。土器が埋納されていないことが埋葬が行われなかったことを示唆するわけでは

ないという見解も無視はできないが⁸、しかしやはりIIIB期においては集落全体が大規模には繁栄していなかったと見なすべきであろう⁹。その後ミケーネ文化が崩壊してIIIC期、とりわけその中期に入ると集落全体が活性化し¹⁰、それが埋葬資料にも反映されている。ミケーネ文化の崩壊により既存の社会および経済システムが機能なくなるとむしろ活況を呈するようになる集落が存在することは他地域の事例からも確認されるところであるが¹¹、アシネのIIIB期からIIIC期にかけての埋葬資料の量的変化もそのような観点から論及される必要がある。

次の亜ミケーネ期についてであるが、横穴墓である墓域Ⅰの1号墓が唯一の資料である。ただしアクロポリス北西麓の市街区などで発見された単葬墓の多くが詳細な時期は不明であり、原幾何学文様期または幾何学文様期と推測されている墓の中に亜ミケーネ期に属するものが含まれている可能性もあるであろう。いずれにせよ、数が少ないことは確かであり、この時期のアシネの集落は相当程度に過疎化していたと推測される。

続く原幾何学文様期に関しては横穴墓1基（墓域Ⅰの1号墓）¹²と単葬墓15基が確認されているが、そのみならず詳細な時期が不明の45基もこの時期の可能性のあることを念頭に置いて議論する必要がある。45基すべてが原幾何学文様期ではないにしても、この時期に急激に数が増えたと思わして間違いがないであろう。アシネはおそらく初期鉄器時代でも前中期から、急激に勢力を拡大したと言える。

2) 墓域の場所

後期青銅器時代IIIC期においてはバルプナの丘の東および北斜面に造営されたミケーネ時代の横穴墓群がそのまま継続して使用された。ミケーネ時代以来の伝統や習慣が未だ保持されていたと解釈されよう。ただしこの場所の墓群において大規模な使用が確認されるのはIIIC期が最後で、続く亜ミケーネ期に属する埋葬はわずかに墓域Ⅰの1号墓の一つ、さらに原幾何学文様期も同様である。そしてそれを最後にバルプナの横穴墓群は完全に放棄された。

原幾何学文様期に入ると埋葬場所は移動し、アクロポリス北西麓の市街区やレヴェンディス調査区、またはアクロポリスの北東側に位置するカルマニオラ調査区などで墓が発見されている。おそらくこの時期にアシネは新しい出発を果たしたと言える。

3) 墓の形態

後期青銅器時代IIIC期はミケーネ時代以来の横穴墓に埋葬されていたのに対して(図3、8、9、10)、原幾何学文様期に入ると単葬墓が規範となる。1972-2号墓のように2遺体が合葬された事例もあるが、原幾何学文様期においては一つの墓に一人の埋葬が原則となり、劇的な変化が起こった。IIIC期は未だミケーネ時代の名残が支配する社会であったが、亜ミケーネ期をはさんでそれが消滅し、原幾何学文様期は全く新しい歩みが踏み出されたと言えよう。

ところで原幾何学文様期の単葬墓の中で主流のタイプは、板状の石や大型の礫で側壁を構築する箱形石棺墓である(図12、17)。それ以外の墓のタイプとしては、単に堅穴を掘っただけの土壙墓も出土している(図18)¹³。いずれも板状の石や大型の礫を被せ、その隙間を小型の石で埋めて蓋をされていることが多い。そして両者ともに、とりわけ被葬者が成人の場合には、幅が狭くかなり細身の形状を呈しているのがアシネの特徴である。

また子供の墓の場合には、通常箱形石棺墓には見られない要素がうかがわれることが多い。たとえばP.G.2号墓は楕円形をしており、1970-14号墓(図23)も正確に長方形になるようには構築されていない。またP.G.4号墓は側壁の一つに、またP.G.13号墓では蓋石に土器(ピソス)の破片が使用されていた。さらに稀有な事例として、1970-9号墓、1970-10号墓および1970-15号墓のように、箱形墓の側壁に干し煉瓦および土や礫、石などを固めたものが使用されている場合がある(図19、21、25)。これら3基は被葬者がいずれも幼児であり、墓全体の大きさが小さい。おそらくそれが土製壁による造営と関係していよう。これらの資料から考えると、子供の墓の場合には成人のものよりも、負担ないしは労力が少ない方法で造られる傾向があったと推察される。

4) 埋葬方法

後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にいたるまで、すべて土葬である。埋葬姿勢に関しては横穴墓の場合には正確に把握できる資料が存在しないが、原幾何学文様期の単葬墓においては伸展葬、しかも仰臥伸展葬が主流である。集落全体でかなり強い規則性が保たれていたと結論できる。

屈葬も存在しないわけではないが、圧倒的に数が少ない。P.G.6号墓とP.G.41号墓は箱形石棺墓における幼児の屈葬、P.G.12号墓(図12)とP.G.28号墓も箱形石棺墓で前者の被葬者はおそらくは成人、P.G.31号墓は土壙墓における成人の屈葬である。となると年齢や墓のタイプと屈葬との間に何らかの関係性がある

るようには見えず、どのような場合に伸展葬ではなく屈葬が選択されたのかは不明である。

ところで伸展葬が主流であることは、上記の墓の形状に影響を与えている。アシネの初期鉄器時代の単葬墓は長さに対して幅が狭く細身であることが特徴であるが、これは遺骸を伸展葬で安置するために必然的に求められたものであろう。そしてこの伸展葬という習慣は、初期鉄器時代のアルゴリスでは少数派である。この時代のアルゴリスの埋葬方法は、アルゴスに代表されるように屈葬が一般的であり、アシネの伸展葬は例外的な存在である¹⁴。アルゴスとアシネは初期鉄器時代において地域を代表する二大集落であり、おそらく勢力を競い合うライバル関係にあった。アシネは初期鉄器時代でも前半期である原幾何学文様期から既に伸展葬を採用しており、文化的にもアルゴスと一線を画する存在であったことが看取される。

5) 副葬品

副葬品はいずれの時期も土器が主流である。横穴墓の場合には墓域Ⅰの1号墓の埋葬AとC以外は¹⁵、一人の遺骸に属する副葬品を確実に見極めることは不可能である。

一方初期鉄器時代に入ってから単葬墓においては副葬品がない事例が多く、それが時期判定にも大きな支障をもたらしている。原幾何学文様期と確実に判断できる墓に関して言えば、土器数個が一般的な副葬品であろう。アテネのアゴラ原幾何学文様期の墓の副葬品と比較すると質素な傾向がうかがわれるが¹⁶、それが貧困の証左であるとは言えまい。

金属製品となるとさらに数が少なく、明らかに原幾何学文様期のものとしては、P.G.18号墓の線状青銅製品、P.G.47号墓の青銅製ピン2本、P.G.48号墓の青銅製指輪4個そして1970-15号墓の鉄製フィブラと鉄製指輪のみである。この1970-15号墓は原幾何学文様期のアシネの墓としては異例とも表現すべき厚葬の類で、ネックレスなども発見されている。

6) その他

上記以外で注目すべき事柄を二つ記しておきたい。

まず原幾何学文様期に属するP.G.25号墓の北西端近くに、鹿の角が埋められていたことである。焼成の痕跡や灰も残っており、葬送儀礼が行われた可能性が推測されている。

次に原幾何学文様期か幾何学文様期と推測されているP.G.23号墓付近から発見された二つの配石遺構である。両者ともに祭祀関連の設備と推測されよう。

おわりに

アシネの集落はミケーネ文化崩壊以降初期鉄器時代にかけて、断絶を経験することなく営まれていた。重ミケーネ期においては相当程度に過疎化していた可能性が高いが、しかし完全に放棄されたわけではなく、後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけておそらく途切れることなく居住されていた。ただし継続して居住されていたとしても、埋葬資料からはこの頃アシネの社会が大規模な変化を経験したことがうかがわれよう。ミケーネ時代以来の墓域や墓制が廃され、原幾何学文様期に新しい門出を迎えた。そして原幾何学文様期において既にアルゴスを中心としたアルゴリス全体の趨勢とは一線を画し、独立した姿勢を有していた。さらに想像をたくましくすれば、この時期からアルゴスとのライヴァル関係は始まっていたのかもしれない。

今後は他の遺跡の資料も交えて、青銅器時代終末期から初期鉄器時代にかけてのアルゴリスの社会変動をより詳細に明らかにしていきたい。

-
- 1 アシネの遺跡の概要および報告書や関連文献に関しては、拙稿「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（3）アシネ」『マテシス・ウニウエルサリス』第19巻第1号、2017年、107-137（以下、拙稿「アシネ」と略）。
 - 2 拙稿「アシネ」執筆以後入手した文献として、Lindblom, Nordquist & Mommsen 2018, Macheridis 2017a, 2017b, 2018, Yioutsos 2017.
 - 3 比較的最近報告された調査として、AD 64, B'1, *Chronika* 2009, 2014, 277-278, 287-290, AD 65, B'1a, *Chronika* 2010, 2016, pp.420-422.
 - 4 AD 63, B'1, *Chronika* 2008, 2014, 285-294.
 - 5 拙稿「アシネ」、112-116。
 - 6 墓域 I の 4 号墓に関しては後期青銅器時代IIIC期の 1 回の埋葬のみが行われたと推測する研究者も存在するが（Sjoberg 2004, 100）、確実ではないであろう。
 - 7 Sjoberg 2004, chap.7.
 - 8 Cavanagh & Mee, 31.
 - 9 Cf. Sjoberg 2004, 41, 105.
 - 10 Cf. Sjoberg 2004, 42.
 - 11 拙稿「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（2）レフカンディ」『史苑』第77巻第2号、2017年、43。
 - 12 この墓の原幾何学文様期の埋葬に関しては、「一覧」に記したように研究者の意見が分かれている。私見では、埋葬は行われずに、墓所祭祀のように単に土器が埋納されたた

けの可能性も含めて考えるべきではないかと感じている。

- 13 B10号墓の遺骸は石壁A72.38の横に平行に葬られており、石壁A72.38が写真右側に写っている。そのため石棺墓のように見えるが、墓そのものは土壙墓である。
拙稿「アシネ」121-122頁においてはこの墓の図面と写真(122頁図8)を単葬墓の事例として紹介した。ただし、121頁での図の挿入箇所が石棺墓の解説をした文章の末尾であったがために、石棺墓と誤解を与える可能性がある。一つ前の文章の末尾に挿入すべきであったことをここに記して訂正しておきたい。
- 14 Cf. Takahashi 2009, 257-258. またアルゴス同様に屈葬を採用しているミケーネに関しては、拙稿「初期鉄器時代のミケーネ—埋葬資料の検討」『史苑』第81巻第1号、2020年、121を参照。
- 15 Cf. Mountjoy 1996, 56-62. ただし埋葬Cに関しては、一人の遺骸であることに疑義を呈する意見も提出されていることに注意する必要がある(Mountjoy 1999, 56-57)。
- 16 拙稿「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡(1) アテネのアゴラ」『史苑』第72巻第1号、2011年、140-143。

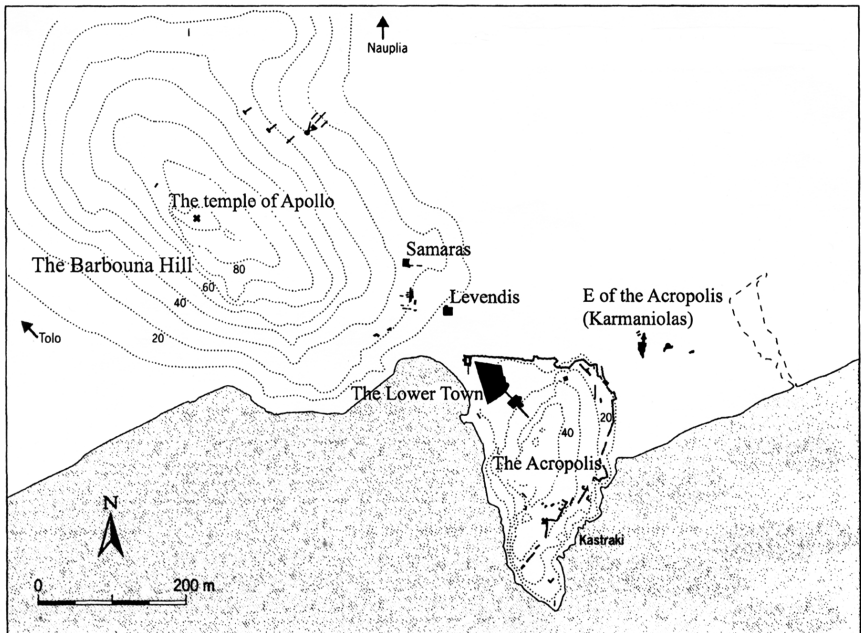


図1 アシネの遺跡全体図および調査区
(出典: Backe-Forsberg & Risberg 2002, 86, fig.1. 一部修正)

アシネにおける後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての墓一覽

アシネの後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての墓に関して記載していく。各項目は、1) 墓の形態、2) 埋葬方法(土葬または火葬、埋葬姿勢など)、3) 副葬品、4) 特記事項である。

【バルブナの横穴墓群】

後期青銅器時代の横穴墓群がバルブナの斜面から発見されている。墓域IとIIの二か所に区分されており、スウェーデンおよびギリシアの調査組織による発掘が行われてきた¹⁾。

①墓域I

バルブナの丘の東斜面に造営された墓域で、26基の横穴墓が確認された(図2)。その内の7基における発掘報告が *Asine* I において公表されている²⁾。ただし1920年代の発掘であるため、詳細な記録が欠けていることが多い³⁾。この墓域Iがミケーネ時代のアシネの中心的な埋葬地であり、またその使用時期は後期青銅器時代II～IIIC期という長期にわたっていることが確認されている⁴⁾。

1号墓

主要報告：*Asine* I, 154-161, 359-377.

他の文献：Persson 1923, 33-38, Frödin & Persson 1925, 41-45, Furumark 1944, 210, *Asine* II:4-1, 21-22, Gillis 1994, Mountjoy 1996, Hughes-Brock 1996, Beck 1996, Sjöberg 2004, 92-97⁵⁾。

時 期：後期青銅器時代IIIC期、亜ミケーネ期、原幾何学文様期

墓域Iの南東端に位置しており、1922年および1924年に発掘された。おそらく後期青銅器時代IIB期に造営され、その後長期にわたって使用された⁶⁾。多数の、そして豪華な副葬品が出土している⁷⁾。ただし形成過程や遺骨および遺物の出土状況などに不明な事柄が多く、種々の問題に関して諸家の意見が分かれている。

1) 横穴墓(図3、4)

玄室は不整形な主室と、その北西側に設けられた二つの副次的な細長い墓室(副室)から構成されている⁸⁾。異例なことにこの墓には羨道が二つあり、北側が8m、南側が9.7mである。両者ともに玄門は礫で閉塞されていた。報告書によれば二つの羨道は時期が異なっており、北側の方が古いと言う⁹⁾。

また北側の羨道からは箱形石棺墓(L.H.12)が1基出土した。この墓は床

面から1.5mの高さに造営されており、後期青銅器時代の土器が出土している。一方南側の羨道においても、床面から1.4m上の場所で埋葬人骨が一体発見された(L.H.10)¹⁰。

2) 土葬

玄室の埋葬に関しては、主室から少なくとも6～7体の遺骸が発見されたが、大半が小片である上に散乱した状態であった¹¹。また二つの副室からも遺骨が発見されている¹²。

主室の中で比較的そのままの状態が発掘されたのはわずかに埋葬A (Burial A) とB (Burial B) の二体の遺骨で、双方ともに伸展葬であった。埋葬Aは主室の中央部から、Bは南側の羨道の玄門付近から発見されている。さらに発掘報告 (*Asine I*) には言及されていないが、この墓を再検討したフルマークは埋葬Bの北西方向に散乱状態の埋葬C (Burial C) が存在したことを記載している¹³。

時期に関しては、これら3つの埋葬の内AとCは後期青銅器時代IIIC期に属する。両者の内古い方が埋葬Cで、副葬品から後期青銅器時代IIIC期中期と判断されているが、ただしマウントジョイによれば遺骨が散乱した状況であったために一人の遺骸に属するものであるか否かは不明であると言う¹⁴。そしてその後、後期青銅器時代IIIC期後期に埋葬Aの遺体が葬られた。この埋葬Aが1号墓の最後の埋葬であり、埋葬Cが最後から二番目の埋葬となる¹⁵。一方で埋葬Bは埋葬AおよびCよりも古い時期であると判断されており、後期青銅器時代IIIB期の可能性が指摘されている¹⁶。

次に玄室以外に関しては、北側の羨道の箱形石棺墓には1体の遺骸が埋葬されており、南側の羨道からも1体の埋葬人骨が発見された。それらの時期に関しては意見が分かれており、判断が難しい。マウントジョイは北側の遺骸は亜ミケーネ期であると推測し、そして南側は原幾何学文様期の可能性を示唆している¹⁷。一方ヘイグとウェルズは北側の羨道の埋葬はおそらく原幾何学文様期、そして南側の時期は不明としている¹⁸。かかる意見の相違は関連する遺物の出土位置について詳細な報告が欠如していることなどに起因しており、今となつては解決を期待することは難しいと言わざるを得ない。

なお玄室内部から焼成の痕跡が発見されているが¹⁹、火葬が行われたとは判断できないであろう。

3) 後期青銅器時代IIB期から原幾何学文様期に至る80個もの土器が発掘された²⁰。本稿の対象である後期青銅器時代IIIC期 (図5)、亜ミケーネ期 (図

6)、原幾何学文様期(図7)のすべての土器が出土していることは特筆に値する。土器以外にも金製品、銀製品をはじめ種々の遺物が発見されているが²¹、とりわけ鉄製品(指輪の破片)が含まれていることは注視する必要がある²²。

2号墓

主要報告: *Asine* I, 162-170, 377-391.

他の文献: Frödin & Persson 1925, 45-49, Krzyszkowska 1996, Gillis 1996, 93, Sjöberg 2004, 98-99²³.

時期: 後期青銅器時代IIIC期

1号墓のすぐ下方に造営されており、1924年に調査された。*Asine* I ではそれまでに調査されたアシネの横穴墓の中で最大と報告されている²⁴。

1) 横穴墓(図8)

羨道は北東方向に開口部があり、長さは19mである。幅は開口部付近では1.9m、一方玄門近くでは1.7mである。玄門は長さが2.9mもあり、礫で閉塞されていた。玄室は奥行きが6.5m、幅が6.2mの長方形である。

また玄室の北西壁の近くに不整形な楕円形をした墓壙が発見された。大きさは長さが1.5m、幅が1m、深さが0.8mであり、石で蓋をされていた²⁵。

2) 土葬

玄室内部から散乱した状態の遺骨が発見され、最低限2人の人物が埋葬されたと判断されている。それ以外に北西壁付近の墓壙内部から、未破壊の遺骨が発見されている。また玄室内部から焼成の痕跡が確認されているが²⁶、それが火葬を示唆するものとは思われない。なお後期青銅器時代IIIC期の埋葬人骨と判断できるものは存在しない。

3) 後期青銅器時代II~IIIC期に至る多数の遺物が発見された。50におよぶ土器のほかに²⁷、石製品や象牙製品²⁸、青銅製品などが含まれている。またエジプトからの搬入品が出土したことで注目されている²⁹。さらに羨道の上方2つの層からは幾何学文様期の土器片が幾つか発見されたことを明記しておきたい³⁰。

4号墓

主要報告: *Asine* I, 173-175, 392.

他の文献: Sjöberg 2004, 100³¹.

時期: 後期青銅器時代IIIC期

2号墓の南東方向に位置しており、1926年に発掘された。

1) 横穴墓

11mの羨道とその北西側の側壁に設けられた壁龕、さらにそれと反対側の壁

に穿たれた別の壁龕から構成される墓である。おそらく岩盤が硬かったためと推察されているが、一般に羨道の先に続く場所に設けられる玄室は造営されなかった³²。

羨道の北西壁にある壁龕は幅が1.9m、奥行きが1.4m、高さが1.2mであり、おそらくここが本来の玄室に代わるこの墓の主要な埋葬施設であったと推察される。石で閉塞された状態で発見された³³。

一方、別の壁に設けられた壁龕は幅0.6m、奥行き0.2m、高さ0.35mの小規模なものである。

2) 土葬

羨道の北西側の側壁に設けられた墓室から遺骨3片が発見された³⁴。

3) 羨道の北西壁の墓室から後期青銅器時代IIIC期の鍔壺が1個出土している。それ以外にミケーネ時代の土器片が多数出土したらしいが、現在では紛失してしまったという³⁵。

5号墓

主要報告：*Asine* I, 175-179, 393-400.

他の文献：Frödin & Persson 1925, 51-53, Gillis 1996, 93, Sjöberg 2004, 100-101³⁶.

時 期：後期青銅器時代IIIC期

この墓は1924年に調査され、*Asine* I で報告された墓域 I の墓の中では西北端に位置している。

1) 横穴墓 (図9)

羨道は9mあり、北側の側壁には小規模な壁龕が設けられていた。玄室は幅が2.1m、奥行きが3mの楕円形で、北西側の一画には墓壙が設けられている。

2) 土葬

調査者は3体の遺骸を確認している。そしてそれらすべてが、後期青銅器時代IIIC期に属すると推測されている³⁷。

3) 青銅製容器や土器が出土しており、時期は後期青銅器時代IIIA期とIIIC期である。発掘報告では羨道の壁龕から「ミケーネ時代以降、もしくは原幾何学文様期」の土器が3個出土したと記されているが、3個とも原幾何学文様期ではなく後期青銅器時代IIIC期であろう³⁸。

また羨道の覆土からは幾何学文様期の土器が出土したと報告されている。

4) 遺物の年代から判断して、この墓は後期青銅器時代IIIA期に最初に使用されたあと、IIIB期においては一切使われることはなく、その後IIIC期に入って再び埋葬が行われたと推測される³⁹。

6号墓

主要報告：*Asine* I, 179-182, 400-407.

他の文献：Frödin & Persson 1925, 53-56, Gillis 1996, 93, Sjöberg 2004, 101-102⁴⁰.

時 期：後期青銅器時代IIIC期

2号墓の北西側に位置しており、1924年に発掘された。

1) 横穴墓 (図10)

羨道は長さ11mで、また奥行きが1.7mある玄門は礫で閉塞されていた。玄室は幅が2.1m、奥行きが2.3mの隅丸方形で、羨道に対して左右不均衡な形状となっている。

2) 土葬

調査者は5体の遺骸を確認しており⁴¹、それらすべてが後期青銅器時代IIIC期に属すると見なす意見がある⁴²。

3) 18個の土器が出土している。報告書ではすべての土器の写真が公表されているわけではないが、後期青銅器時代IIIC期のものが多く含まれていることは明らかである⁴³。土器以外にも、金製品などが出土している。

4) 遺物の年代から判断して、この墓は後期青銅器時代IIIA期に使用されたあと、IIIB期には一切使われることがなく、IIIC期に再利用された可能性が推察される⁴⁴。

7号墓

主要報告：*Asine* I, 182-188, 407-421.

他の文献：Gillis 1996, 94, Mårtensson 2002, Sjöberg 2004, 102-103⁴⁵.

時 期：後期青銅器時代IIIC期

1926年の春に発掘された。

1) 横穴墓

羨道は9mあり、玄門は礫で閉塞されていた。玄室は台形状で、羨道に対して左右不均衡な形をしている。大きさは床面近くだと幅が最大で2.4m、奥行きが最大で4.25m、一方床から1m上の位置だと幅が最大で4.8m、奥行きが2.8mである。玄室内部からは木製の棺が使用されたと推測される資料が出土している⁴⁶。

2) 土葬

この墓には少なくとも8体の遺骸が葬られており、その内3体が幼児であった可能性が指摘されている⁴⁷。発掘報告においては、最後の3つの埋葬に関しては土器の出土状況から個体の識別が可能であると記載されている⁴⁸。

また玄室内部からは焼成の痕跡が確認されているが⁴⁹、それが火葬を示唆するものとは判断できないであろう。

3) 後期青銅器時代II期からIIIC期に至る54個もの土器が出土した。さらに金属製品、象牙製品、ガラス製品、石製品なども出土している。長期にわたって豪華な副葬品が納められていたことは、特筆にあたいしよう。

19号墓 (Οικόπεδο αδελφών Γρηγ. Νιώτη)

主要報告：AD 50, B'1, *Chronika 1995*, 2000, 103-104.

時 期：後期青銅器時代IIIC期

墓域 I に属すと判断され⁵⁰、他の墓の西方に位置している。

1) 横穴墓

羨道は長さ19mあり、玄門は礫で閉塞されていた。玄室は不整形な隅丸の台形状で⁵¹、意図的な行為か自然崩壊かは不明であるが、幾何学文様期に一部破壊されている。玄室内部から長さ0.55m、幅0.45mの小規模な墓壙が発見された。

2) 土葬

玄室からは遺骨が発見された。墓壙内部からは遺骨とともに後期青銅器時代II/IIIA1期の土器が発見されたので、おそらくその時期の埋葬であろう。後期青銅器時代IIIC期と判断される埋葬に関しては、何も報告がない。

3) 土器や青銅製品、後期青銅器時代のフィギュリン(Φタイプ)2個などが発見されている。副葬品の年代から後期青銅器時代II/IIIA1期からIIIC期に至る使用が推測されている。また幾何学文様期の土器も少数発見されている。

②墓域II

墓域IIはバルブナの丘の北斜面に位置しており、墓域Iの北西方向に当たる。1926年に24基の横穴墓が発見されたが、その際調査されたのはわずかに1基のみで *Asine I* に報告された⁵²。

2号墓 (Οικόπεδο Σπύρου Γογωνά)

主要報告：AD 50, B'1, *Chronika 1995*, 2000, 103.

時 期：後期青銅器時代IIIC期

墓域IIに属すと判断され⁵³、*Asine I* で報告された墓から13m西方に位置する。

1) 横穴墓

天井は農作業によって破壊されていた。羨道の残存部の長さは4.15m、幅が0.85~1.20mである。玄室は“直径2.80mの円形”と報告されている⁵⁴。

玄室内部では墓壙が二つ発見された。墓壙1 (ταφή αριθ.1) は玄室の西側

に穿たれており、大きさは1.25×0.25×0.30mである。墓壙2 (ταφή αριθ.2) は玄室東部で発見され、大きさは1.85×0.50×0.40mである。

2) 土葬

墓壙1からは2体の遺骸が発見された。墓壙2からも遺骨が出土したが、散乱した状態であった。

3) 後期青銅器時代II~IIIC期の土器や他の遺物が発見された。

墓壙1からは後期青銅器時代IIIA1期の土器1個とIIIC期の土器1個が発掘されたと報告されている⁵⁵。

③その他

バルブナのヘレニズム時代の墓から後期青銅器時代IIIC期の土器が4個出土した。おそらく元来はIIIC期の埋葬が行われた墓の副葬品であり、それがヘレニズム時代の人々に発見されて埋納されたものであろう⁵⁶。それら4個の土器は当初ミアケネ期と報告されたが、マウントジョイは後期青銅器時代IIIC期と判断している⁵⁷。

【アクロポリス北西麓の市街区⁵⁸】

アクロポリスの北西側の麓に位置する調査区で、1920年代に発掘された。

P.G.1号墓

主要報告：*Asine* I, 129, 144, 425.

他の文献：Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.306.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

不整形な箱形石棺墓であり、主軸は南南西—北北東方向である。内部の計測で長さ1.4m、幅0.35m、深さ0.2mである。複数の平たい石で蓋をされていた。

2) 土葬 (仰臥伸展葬)

頭部が南南西側に置かれた仰臥伸展葬である。右腕は大腿骨の脇に、左腕は骨盤の上に置かれていた。凶面から判断する限り、顔面は西側方向を向いている。

3) ピンと推測されている青銅製品1本が右肩の上に副葬されていた。さらに中期青銅器時代の土器片が右腕の上から発見された。

P.G.2号墓

主要報告：*Asine* I, 129-130, 144.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 楕円形石棺墓

礫で壁面が構築されている石棺墓ではあるが、長方形ではなく不整形な楕円形である。内部の計測で長さ0.58m、幅0.32m、深さ0.18mで、主軸は北東—南西方向である。4個の礫もしくは板状の石が蓋として使用されており、おそらく本来はもう1個存在していた。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

欠損している箇所がある子供の遺骸が発見された。頭部が北東側に置かれた仰臥伸展葬で、右手は骨盤に乗せられており、左手は伸びた状態でわきに置かれていた。右足は若干曲げられている。

3) 副葬品は発見されなかった。

P.G.3号墓

主要報告：*Asine* I, 130, 144, 425.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

やや不整形な箱形石棺墓で、内部の計測で長さ1.50m、幅0.3m、深さ0.3mである。主軸は北東—南西方向である。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

仰臥伸展葬の遺骨で、右手は骨盤の上に乗せられており、左手は欠損していた。被葬者は高齢の女性と報告されている。

3) 右手の骨の下から青銅製の指輪が発見された。

P.G.4号墓

主要報告：*Asine* I, 130, 144.

他の文献：*Asine* II:4-1, 22.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

箱形石棺墓ではあるが、側壁の内長辺2つと短辺1つは板状の石で造られているのに対して、残りの短辺一つは土器（ピソス）の破片で構築されている。蓋に使用された石は残っていなかった。

2) 土葬

被葬者は子供であり、遺骨は不完全な状態であった。埋葬姿勢に関しては報告がないことから、おそらくはっきりと判断できなかったと推測される。

3) 副葬品は発見されなかった。

P.G.5号墓

主要報告：*Asine* I, 130, 144.

他の文献：*Asine* II:4-1, 22.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

小型の箱形石棺墓で、蓋石は残っていなかった。

2) 土葬

被葬者は子供であり、遺骨は不完全な状態であった。埋葬姿勢に関しては報告がないことから、おそらくはっきりと判断できなかったと推測される。

3) 副葬品は発見されなかった。

P.G.6号墓

主要報告：*Asine* I, 130, 144.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

不整形な箱形石棺墓で、内部の計測で長さ0.5m、幅0.25m、深さ0.15mである。主軸は東北東—西南西方向である。蓋石は残っていなかった。

2) 土葬（屈葬か？）

被葬者は幼児で、遺骨は不完全な状態であった。おそらく屈葬であったと推測されている。やや右側に傾いて安置されていたことが報告されているが、横臥と判断していいか否かは不明である。頭部は東北東方向に置かれていた。右手は腹部の上に置かれており、左手は見つかっていない。

3) 副葬品は発見されなかった。

P.G.7号墓

主要報告：*Asine* I, 130, 144.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 石棺墓

破壊を受けた石棺墓である。

2) 土葬

子供の遺骨が埋葬されていた。

3) 副葬品は発見されなかった。

P.G.8号墓

主要報告：*Asine* I, 130, 144.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 石棺墓

2) 土葬

被葬者は子供で、遺存状態の悪い遺骨が出土した。

3) 副葬品は発見されなかった。

P.G.9号墓

主要報告：*Asine* I, 130-131, 145, 425, 427.

他の文献：*Asine* II:4-1, 22, 26, *Asine* II:4-3, 283-284, Lemos 2002, 22, 35, 70, 232, pl.55:4-6.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓

小型の箱形石棺墓である。蓋石は残っていなかった。

2) 土葬

被葬者は子供で、埋葬姿勢に関しては記載がない。また写真からも判断できない⁵⁹。

3) 土器が3個出土した。オイノコエ（高さ15cm）、スキュフォス（高さ5.5cm）と手びねりの鉢（高さ8.5cm）であり、すべて遺骨の上に安置されていた。

P.G.10号墓

主要報告：*Asine* I, 131, 145, 425.

他の文献：Kilian-Dirlmeier 1984, 73, no.268, Lemos 2002, 107.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

礫や板状の石で構築された不整形な箱形石棺墓である。主軸は東北東—西南西方向で、内部の計測で長さ1.78m、幅0.26-0.45m、深さ0.30mである。平らな石数個および多数の礫で蓋をされていた。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

両腕を伸ばした状態の仰臥伸展葬の遺骨が発見された。頭部は東北東側に置かれていた。図面から推測する限り、被葬者はおそらく成人ではないかと推測される。

3) 副葬品が2個出土している。右肩の上から青銅球が付いた鉄製ピンが、左の上腕近くから骨製の紡錘車が発見された。

P.G.11号墓

主要報告：*Asine* I, 131, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓 (図11)

南南西—北北東方向を主軸とする箱形石棺墓で、内部の計測で長さ1.75m、幅0.33-0.5m、深さ0.3mである。板状の石と礫で蓋をされていた。

2) 土葬 (仰臥伸展葬)

両手を伸ばした仰臥伸展葬の遺骨である。図面から推測する限り被葬者は成人であり、また顔面は南東方向に向けられていた。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.12号墓

主要報告：*Asine* I, 132, 145, 425.

他の文献：Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.304, no.305.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓 (図12)

主軸は北西—南東方向で、内部の計測で長さ1.43m、幅0.43m、深さ0.3mである。6個の板状の石および多数の礫で蓋をされていた。

2) 土葬 (屈葬)

欠損した箇所がある状態で、屈葬の遺骨が発見された。やや右側に傾いた姿勢で安置されていたと報告されているが、図面で見ると横臥というよりは仰臥ではないかと推測される。脚部は股関節と膝の双方が鋭角に曲げられており、とりわけ右足は屈曲の度合いが強い。被葬者の年齢に関しては何も記載がないが、成人の可能性が高いと図面から推察される。

3) 青銅製のピンが2本と青銅製の指輪が1個副葬されていた。ピンは1本ずつ両肩に、指輪は右手の骨の上に置かれていた。

P.G.13号墓

主要報告：*Asine* I, 132, 145.

他の文献：*Asine* II:4-1, 21.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 土墳墓

原幾何学文様期の粗製土器の破片数個で蓋がされていた。

2) 土葬

遺存状態の悪い子供の遺骨が発見された。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.14号墓

主要報告：*Asine* I, 132, 145.

他の文献：*Asine* II:4-1, 21.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

- 1) 土壙墓
- 2) 土葬

遺存状態の悪い子供の遺骨が発掘された。

- 3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.15号墓

主要報告：*Asine* I, 132, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

- 1) 土壙墓
- 2) 土葬（仰臥伸展葬）

頭部が南側に置かれた仰臥伸展葬で、両手は腹部に置かれていた。被葬者は成人であった。

- 3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.16号墓

主要報告：*Asine* I, 132, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

- 1) 箱形石棺墓

蓋石は残っていなかった。

- 2) 土葬

遺存状態の悪い遺骨が発見された。

- 3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.17号墓

主要報告：*Asine* I, 132, 145, 425.

他の文献：Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.315.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

- 1) 箱形石棺墓

主軸は東南東—西北西方向で、内部の計測で長さ1.5m、幅0.3m、深さ0.2mである。主に小さめの石で蓋をされていた。

- 2) 土葬（仰臥伸展葬）

被葬者は高齢者と推測されている。頭部は東南東側に置かれており、右手は胸部の上に乗せられていた。左手も曲げられていたと報告されている⁶⁰。

- 3) 鉄製品が1個副葬されていた。破片の状態であるが、おそらくピンと推測

されており、左肩の近くで発見された。

P.G.18号墓

主要報告：*Asine* I, 132, 145, 425, 427-428.

他の文献：*Asine* II:4-1, 21-22, *Asine* II:4-3, 283-284, Lemos 2002, 22, 32, 74, 90, 232.

時期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓

北西—南東方向を主軸とし、内部の計測で長さ0.85m、幅0.3m、深さ0.3mである。板状の石2個が蓋石として発見されている。

2) 土葬

少量の遺骨が出土した。ウェルズは、大きさから判断して被葬者は子供と推測している⁶¹。

3) 土器3個と青銅製品1個が出土した。土器の種類は高い脚部を持つカップ（高さ7cm）とレキュトス（高さ12cm）⁶²、三葉形の口縁部を持つ手びねりの水差し（高さ8cm）である。青銅製品はねじられた線状のもの（twisted bronze wire）と報告されている。他に炭化物（particles of charcoal）も発見された。

P.G.19号墓

主要報告：*Asine* I, 132, 145.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

かなり破壊を受けており、一部は残っていない。主軸は北東—南西方向である。おそらく長さ0.9m、幅0.25m、深さ0.15mと報告されている。蓋石の1つが発見された。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

遺存状態の悪い子供の遺骨が発見された。頭部は北東方向に置かれており、脚部の下の方は欠損していた。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.20号墓

主要報告：*Asine* I, 132-133, 145.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

北東—南西方向を主軸とし、内部の計測で長さ1.17m、幅0.35m、深さ0.2mである。板状の石4個が蓋石として発見された。

2) 土葬

遺存状態の悪い遺骨が発見された。頭部は北東側に置かれていた。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.21号墓

主要報告：*Asine* I, 133, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

東北東—西南西方向を主軸とし、内部の計測で長さ0.62m、幅0.23m、深さ0.25mである。板状の石2個や礫で蓋をされていた。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

子供の遺骨が発見された。頭部は東北東側に置かれていた。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.22号墓

主要報告：*Asine* I, 133, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 土壙墓

ピソスの破片10個が蓋として使用されており、その内3個には文様が施されていた。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

やや遺存状態の悪い遺骨が発見された。頭部は東側に置かれており、両手は伸ばされていた。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.23号墓

主要報告：*Asine* I, 133-134, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

主軸は北西—南東方向で、長さ0.54m、幅0.30m、深さ0.20mである。板状の石や礫で蓋をされていた。

2) 土葬（仰臥屈葬）

遺存状態が悪い子供の遺骨が発見された。脚部はやや屈葬の状態で、両側に置かれた手は若干曲げられていた。頭部は北西側に置かれていた。

3) 副葬品は出土しなかった。覆土から炭化物（some charcoal particles）が発見された。

4) 23号墓の近辺から、下記二つの遺構が発見された。

①西南西の方向へ0.1mほど離れた場所から、配石遺構が出土した。6個の礫が中央の大き目の石(0.27×0.17m)を囲むように構築されている。遺構全体の大きさは0.58(北東—南西方向)×0.43mである。墓を祀るための設備(grave-altar)と解釈されている。

②23号墓の0.60mほど東方から、①と似た遺構が発見された。ここでは板状の石が立てられたり礫が配されることにより、境界が明確に設定されている。遺構の大きさは0.8(北—南)×0.63mである。またこの遺構に使用された石の中から、砥石2個が発見された。

P.G.24号墓

主要報告：*Asine* I, 134, 145, 425.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

側壁が板状の石や大き目の礫で構築された不整形な箱形石棺墓で、内部の計測で長さ1.30m、幅0.35m、深さ0.35mである。蓋石は発見されなかった。主軸は北西—南東方向である。

2) 土葬(仰臥伸展葬)

頭部は北西側に置かれており、右手は大腿部、左手は腹部に乗せられていた。まだ成長しきっていない(half grown)年齢の被葬者と報告されている⁶³。

3) 右手の上腕(肘の上方)の近くから、副葬品と見なされている遺物(small astragal)が発見されている。また覆土からはミケーネ時代の土器が出土した。

P.G.25号墓

主要報告：*Asine* I, 134-135, 145, 425, 428-429.

他の文献：*Asine* II:4-1, 22, 24, *Asine* II:4-3, 283, Lemos 2002, 17, 41, 75, 232, pl.28:1-3.

時期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓

主軸は北西—南東方向である。内部の計測で長さ1.65m、0.45m、深さ0.25mである。6個の板状の石で蓋をされ、さらに小型の石で隙間を埋められていた。

2) 土葬(仰臥伸展葬)

頭部は北西側に置かれており、両腕を伸ばした状態であった。右足は左足の上に乗せられている。

3) 土器が3個副葬されていた(図13)。器形は水差し(高さ20.5cm)、スキ

ユフォス（高さ12.7cm）、そしてオイノコエ（20cm）である。

4）墓の北西端近くで焼成の痕跡や灰が残る層に鹿の角が埋められていた。葬送のための犠牲かと推測されている。

P.G.26号墓

主要報告：*Asine* I, 135, 145, 425, 429.

他の文献：*Asine* II:4-1, 22, 26, *Asine* II:4-3, 283, Lemos 2002, 22, 29, 76, 232, pl.55:1-2.

時 期：原幾何学文様期

1）箱形石棺墓

遺存状態が極めて悪い。蓋石は残っていなかった。

2）土葬

少量の遺骨が発見された。被葬者は子供である⁶⁴。

3）土器が2個出土した（図14）。器形は水差し（高さ15.5cm）とカップ（8.2cm）である。

P.G.27号墓

主要報告：*Asine* I, 135, 145, 425, 430-431.

他の文献：*Asine* II:4-1, 22, *Asine* II:4-3, 283-284, Lemos 2002, 22, 29, 74, 90, 232, pl.55:3.

時 期：原幾何学文様期

1）箱形石棺墓

一部破壊されており、蓋石は残っていない。

2）土葬

遺存状態の悪い遺骨が発見された。被葬者は子供である⁶⁵。

3）土器4個と石製遺物1個が出土した。土器はカップ（高さ6.9cm）、レキユトス（高さ16cm）⁶⁶、ほかに三葉形の口縁部を持つ手びねりの水差し2個である。石製遺物は凍石（steatite）製で、その用途に関して発掘報告においてはボタン（button）と紡錘車（spindle whorl）という異なる二つの見解が記載されている⁶⁷。

P.G.28号墓

主要報告：*Asine* I, 135-136, 145.

他の文献：*Asine* II:4-1, 21.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

東北東—西南西方向を主軸とし、内部の計測で長さ1m前後、幅0.3-0.4m、深さ0.2mである。4個の板状の石で覆われており、さらに隙間が小型の礫で埋められていた。

2) 土葬 (屈葬)

やや右側に傾いた姿勢で安置されていたと報告されているが、横臥と判断していいか否かは不明である。頭部は東北東側に置かれており、両腕は伸ばされていた。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.29号墓

主要報告：*Asine* I, 136, 145.

他の文献：*Asine* II:4-1, 21.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓⁶⁸

完全な状態ではない。主軸は東南東—西北西方向で、内部の計測で長さ0.71m、幅0.38m、深さ0.20mである。4個の板状の石で蓋をされていた。

2) 遺骨は出土しなかった⁶⁹。

3) 一切の遺物が出土しなかった。

4) 墓の東端において0.2-0.3mの深さの場所で灰や大型の石が発見された。

P.G.30号墓

主要報告：*Asine* I, 136, 145.

他の文献：*Asine* II:4-1, 21.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

北西—南東方向を主軸とし、内部の計測で長さ0.55m、幅0.25m、深さ0.15mである。南東部分のみ蓋石として使用された板状の石が残っていた。

2) 土葬

少量の遺骨が発見された。墓の大きさからウェルズは子供の墓ではないかと推測している⁷⁰。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.31号墓

主要報告：*Asine* I, 136, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 土壙墓

2) 土葬 (屈葬)

被葬者の年齢は40歳前後である。遺骨はやや右方向に傾いていたと報告されているが、横臥と判断できるか否かは不明である。頭部は南東側に置かれており、右側の腕はおそらく胸部に置かれていた。一方左手は腹部に乘せられていた。足は曲げられており、とりわけ左足は屈曲の度合いが強い。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.32号墓

主要報告：*Asine* I, 136, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

遺存状態が悪く、小型である。

2) 土葬

少量の遺骨が出土した。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.33号墓

主要報告：*Asine* I, 136, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 土壙墓

2) 土葬

遺存状態の悪い遺骨が出土した。

3) 副葬品に関しては一切言及がないことから、出土しなかったと推測される。

P.G.34号墓

主要報告：*Asine* I, 136-137, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

主軸は東一西方向で、内部の計測で長さ0.70m、幅0.26m、深さ0.20mである。蓋石として使用されていた3個の板状の石が発見されたが、東端のものは残っていないかった。

2) 土葬 (伸展葬)

不完全な子供の遺骨が発見された。やや右側に傾いていたと報告されているが、横臥と判断できるかどうかは不明である。頭部は東側に置かれており、両腕は伸ばされていた。片方の手は腹部の上に乗せられており、また左足は右足

の上に組んで置かれていた。

3) 副葬品には言及がないので、出土しなかったのであろう。足の近くから魚のものと推測される骨が出土した。

P.G.35号墓

主要報告：*Asine* I, 137, 145, 425, 431.

他の文献：*Asine* II:4-1, 22, *Asine* II:4-3, 284, Lemos 2002, 90, 93, pl.100:6.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

北東—南西方向を主軸とし、内部の計測で長さ0.56m、幅0.20m、深さ0.20mである。蓋石は発見されなかった。

2) 土葬（おそらく仰臥伸展葬）

遺存状態の悪い子供の遺骨が発見された。頭部は北東側に置かれており、少なくとも右手は伸ばされていた。

3) 頭蓋骨の近くから手びねりの土器が2個出土した。一つは水差し（高さ11cm）で、もう一つはひしゃく状の土器（高さ5.5cm、取っ手を含めると12.2cm、図15）である。

P.G.36号墓

主要報告：*Asine* I, 137, 145, 425, 431.

他の文献：*Asine* II:4-1, 22, Lemos 2002, 92.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

北東—南西方向を主軸とし、内部の計測で長さ0.71m、幅0.25m、深さ0.15mである。5個の板状の石で蓋をされていた。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

遺存状態の悪い子供の遺骨が出土した。頭部は北北東に置かれていた。左手の上腕は胴体のわきに置かれていたが、左手の前腕および右手は残っていなかった。

3) 両足の間から、手びねりのカップ（高さ6.5cm）が出土した。

P.G.37号墓

主要報告：*Asine* I, 137-138, 145, 425, 431.

他の文献：*Asine* II:4-1, 22, *Asine* II:4-3, 284, Lemos 2002, 92.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

北西—南東方向を主軸とし、内部の計測で長さ0.67m、幅0.33m、深さ0.15mである。板状の石2個で蓋をされていた。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

遺存状態の悪い子供の遺骨が出土した。右腕は若干曲げられて、大腿骨の上に乗せられていた。左腕は残っていなかった。

3) 左足の近くからは手びねりの鉢（高さ4.5cm）が1個発見され、右足の近くからは獣骨が発見された。

P.G.38号墓

主要報告：*Asine* I, 138, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

北東—南西方向を主軸とし、内部の計測で長さ1.38m、幅0.35m、深さ0.3mである。板状の石6個で蓋をされていた。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

被葬者の年齢は青年期で、右手は大腿骨の上に、左手は臀部の下に置かれていた。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.39号墓

主要報告：*Asine* I, 138, 145, 425.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

北北西—南南東方向を主軸とし、内部の計測で長さ1.2m、幅0.33m、深さ0.3mである。6個の不整形な板状の石で蓋をされていた。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

遺存状態の悪い遺骨が出土した。年齢は青年期で、頭部は南南東に置かれていた。左腕と右腕の上腕部は胴体の傍らに置かれていた（右腕の前腕部と両手は残っていなかった）。

3) 左肩の近くから亀の甲羅が出土した。また覆土からは多数の小さい貝殻が発見された。

P.G.40号墓

主要報告：*Asine* I, 138, 145, 425.

他の文献：Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.314.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

南—北方向を主軸とし、内部の計測で長さ1.83m、幅0.43m、深さ0.35mである。不整形な板状の石6個で蓋をされていた。

2) 土葬（仰臥伸展葬）

被葬者は成人で、頭部は南側に置かれていた。右腕は伸ばされており、左腕は若干曲げられて大腿骨の上に置かれていた。

3) 鉄製品が2個出土した。具体的には、右肩の上から鉄製ナイフが、また右の肩甲骨の下から鉄製ピンが発見された。

P.G.41号墓

主要報告：*Asine* I, 138-139, 145.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

東北東—西南西方向を主軸とし、内部の計測で長さ0.55m、幅0.27m、深さ0.20mである。板状の石3個で蓋をされていた。

2) 土葬（おそらく屈葬）

遺存状態の悪い遺骨で、被葬者は幼児である。頭部は東側に置かれていた。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.42号墓

主要報告：*Asine* I, 139, 145.

時 期：不明⁷¹

1) 土壙墓

2) 土葬

遺存状態が悪い遺骨が発見された。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.43号墓

主要報告：*Asine* I, 139, 145, 425.

他の文献：Kilian-Dirlmeier 1984, 73, no.269, 79, no.296, Lemos 2002, 22, 107, 232.

時 期：原幾何学文様期または幾何学文様期か？

1) 箱形石棺墓

北北東—南南西方向を主軸とし、内部の計測で1.55m、幅0.3m、深さ0.3mである。中央上部に板状の石1個が発見されたが、他の蓋石は残ってなかった。

2) 土葬 (仰臥伸展葬)

やや左側に傾いて安置されていたと報告されているが、図面で判断する限りは仰臥である。頭部は南南西に置かれていた。左手は伸ばされており、右手は腹部に乗せられていた。伸展葬ではあるが、両足は若干曲げられていた。

3) 右肩の下から青銅製ピンが、左肩の下からは青銅球が付いた鉄製ピンが発見された。

P.G.44号墓

主要報告: *Asine* I, 139, 145, 425.

他の文献: Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.313.

時期: 原幾何学文様期または幾何学文様期か?

1) 箱形石棺墓

北東—南西方向を主軸とする。遺存状態が悪い。

2) 土葬 (仰臥伸展葬)

頭部は南西側に置かれており、両手は腹部の上に乗せられていた。

3) 金属製品が4個出土した。左肩の上から青銅製ピンが、右肩の近くから鉄片(ピン?)が、右手の薬指からは青銅製指輪が、左手の薬指からは別の青銅製指輪が発見された。

P.G.45号墓

主要報告: *Asine* I, 139, 145.

時期: 原幾何学文様期または幾何学文様期か?

1) 箱形石棺墓

小型の墓で、蓋石は残っていなかった。

2) 土葬

少量の遺骨が発見された。

3) 副葬品は出土しなかった。

P.G.46号墓

主要報告: *Asine* I, 139, 145.

時期: 原幾何学文様期または幾何学文様期か?

1) 土壙墓

2) 土葬

埋葬人骨1体が発見された。

3) 副葬品に関しては記載がないので、おそらく出土しなかったと推測される。

【バルブナの南および東斜面】

バルブナの南および東斜面において発掘された墓である⁷²。

P.G.47号墓

主要報告：Hägg 1971, 43-44.

他の文献：*Asine* II:4-1, 21-22, 24, *Asine* II:4-3, 283, Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.309-310, Lemos 2002, 17, 41, 232, pl.28:4-5.

時 期：原幾何学文様期

- 1) 箱形石棺墓
- 2) 不明
- 3) 土器 2 個と青銅製ピン 2 本が発見された。土器はオイノコエ（高さ 29cm）とスキュフォス（高さ 12.3-12.5cm）である（図16）。

P.G.48号墓

主要報告：Hägg 1971, 44-45.

他の文献：*Asine* II:4-1, 21-22, *Asine* II:4-3, 283, Lemos 2002, 74.

時 期：原幾何学文様期

- 1) 箱形石棺墓
- 2) 不明
- 3) レキュトス 2 個（高さ 13.5cm と 12cm）と青銅製指輪 4 個が副葬されていた。

【レヴェンディス調査区】

レヴェンディス調査区はバルブナの丘の東南側の麓に位置しており、1970年代に入ってから調査が開始された。新石器時代からローマ時代まで長期にわたる資料が出土している調査区である⁷³。

B 2号墓

主要報告：Boreas 4:1, 38-39, Boreas 4:2, 93, 107-108.

他の文献：*Asine* II:4-1, 21⁷⁴.

時 期：原幾何学文様期

- 1) 土壙墓か？

後代に造られた二つの壁に破壊されているため、元来の形状は不明である（二つの壁の内、一つは後期幾何学文様期である）。ただし墓を構築するための石材が残っていないことから、土壙墓と推測されている。私見では土壙墓のみならず、全く墓壙が掘られていなかった可能性も否定できないと思われる。主軸は南—北方向である。

2) 土葬

遺存状態の悪い遺骨が発掘された。年齢は若年の成人 (young adult) で、おそらくは女性と推測されている。頭蓋骨は南側に置かれており、埋葬姿勢は左側を下にした横臥屈葬 (crouched position) と報告されている。しかし写真や図からははっきりとした姿勢は読み取ることができず⁷⁵、さらには破壊を受けていることを考え合わせると、それが屈葬であったと確実に判断できるか否か難しいように感じられる。

3) この埋葬に関して3つの土器片が報告されており、その内遺骨に混じって出土した原幾何学文様期の土器片 (no.59) は副葬品と見なして差しつかえないであろう⁷⁶。さらに別の1点 (no.60) も原幾何学文様期である。

B9号墓

主要報告：Boreas 4:1, 79-80, Boreas 4:2, 93, 117.

他の文献：Asine II:4-1, 21-22⁷⁷.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓 (図17)

板状の礫を組み合わせた長方形で、大きさは外側の計測では78×30-35cm、内部の計測で62×12-18cmである。幅の狭さが際立っていると言えよう。高さは36cmである。5個の礫で蓋をされていた。主軸は南東—北西方向である。

2) 土葬 (横臥伸展葬)

遺存状態の良好な幼児の遺骨が埋葬されていた。頭部が南東側に置かれた横臥伸展葬で、顔面は北東方向に向けられていた。両手は骨盤の上で組まれていた。

3) 足元に土器2個が副葬されていた。

B10号墓

主要報告：Boreas 4:1, 72-74, Boreas 4:2, 93, 114.

他の文献：Asine II:4-1, 21⁷⁸.

時 期：原幾何学文様期

1) 土壇墓 (図18)

主軸は西南西—東北東方向で、1.15×2.15mの範囲が礫で覆われていた。ただし、時期は不明であるが、おそらく盗掘されていたと推測される。

2) 土葬 (横臥伸展葬)

西側に頭部が置かれた横臥伸展葬の遺骨が発見された。上体は若干南側に傾いており、顔面も南方向へ向けられている。被葬者は成人で、墓壇内での計測では全身が162cmである。両手は骨盤の上で組まれていた。

3) スキュフォスの脚部とスキュフォスもしくはカップの口縁部が報告されている⁷⁹。

墓内部の覆土および周辺からは原幾何学文様期のみならずミケーネ時代の土器片が多数発見され、また遺骨と同じ深さから原幾何学文様期の土器片が出土している⁸⁰。

B26号墓

主要文献：*Asine* II:1, 85.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期（？）

- 1) 不明
- 2) 不明
- 3) 不明

B36号墓

主要文献：*Asine* II:1, 85.

時期：原幾何学文様期または幾何学文様期（？）

- 1) 不明
- 2) 不明
- 3) 不明

【カルマニオラ調査区】

アクロポリスの北東側に位置する調査区である⁸¹。

1970-6 (“3A”) 号墓

主要文献：*Asine* II:4-1, 11, 22, 25, 28-31.

他の文献：*Asine* II:1, 85, 86.

時期：原幾何学文様期

- 1) 箱形石棺墓

主軸は東—西方向と報告されている。内部の計測で50×19×18.5cmで、側壁も蓋も板状の石で構築されていた。蓋石の隙間は小型の石で埋められていた。床には大型の石が置かれていた。

- 2) 土葬

遺存状態が悪い遺骨が出土した。被葬者はおそらく男性の幼児で、年齢は0～2か月であった。頭部は東側に置かれていた。

- 3) 頭蓋骨の近くから、水差し（高さ8.9cm）が1個発見された。

1970-9 (“4A”)号墓

主要文献：*Asine* II:4-1, 11, 21-22, 25, 28-31.

他の文献：*Asine* II:1, 85, 86.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓 (図19)

主軸は北北東—南南西方向と報告されている⁸²。内部の計測で51×19×17cmである。北側および東側⁸³の側壁は粘土や礫、石などを固めたもので構築されていた。

2) 土葬 (横臥屈葬)

少量の遺骨が出土した。粘土と石を固めた床に安置されていた。左側を下方にした横臥屈葬で、頭部は西側に置かれていた。おそらく女性と推測されており、年齢は11か月前後である。

3) 頭蓋骨と肋骨の間から、口縁上端に取っ手が付いた注口のある水差し (spouted jug, “feeding bottle”、高さ11.5cm) が出土した (図20)。

1970-10 (“4B”)号墓

主要文献：*Asine* II:4-1, 11-12, 22, 28-31.

他の文献：*Asine* II:1, 85, 86, Lemos 2002, 74.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形土棺墓 (図21)

形状は箱形だが、石ではなく厚さ9cm前後の土製側壁により構築されている。東—西方向を主軸とし、内部の計測で41.5×19cmである。

2) 土葬 (横臥屈葬)

遺骨は不完全な状態であるが、頭部を東側に置き、左側を下方にした屈葬と報告されている。2か月ほど早産で生まれた子供で、おそらく地中海貧血 (thalassemia) を患っていた。

3) おそらく数個の土器が副葬されていた。頭部近くからレキュトス (高さ8.4cm、図22) と土器片3個、さらにおそらく両手があった場所に手びねりの土器が破片で発見された。手びねりの土器は水差しの可能性が推測されている。

1970-13 (“5A”)号墓

主要文献：*Asine* II:4-1, 9, 20, 22, 31.

他の文献：*Asine* II:1, 46, fig.38, 85.

時 期：原幾何学文様期 (もしくは幾何学文様期) か?⁸⁴

1) 土墳墓

主軸は北東—南西方向で、大きさは正確には不明である。

2) 土葬 (仰臥でおそらく屈葬)

被葬者は15歳前後の女性である。頭部は北東側に置かれており、顔面は北側を向いていた。左手は伸ばされており、右手は骨盤の上に置かれていた。

3) 副葬品は出土しなかった。覆土からはミケーネ時代後期と原幾何学文様期の土器片が発見された。

1970-14 (“5B”) 号墓

主要文献：*Asine* II:4-1, 15-16, 21-22, 28, 31.

他の文献：*Asine* II:1, 85, 87, Lemos 2002, 22, 43, 76, 90, 232.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓 (図23)

北東—南西方向を主軸とし、内部の計測で39.5×25×20cmである。側壁は板状の石や礫で構築されていた。

2) 土葬 (横臥でおそらく屈葬)

被葬者は新生児で、おそらく女性である。左側を下方にした横臥で、頭部は北西に置かれていた。遺骨は良好な遺存状態であった。

3) 土器3個が副葬されていた。器形は水差し (高さ10.5cm)、高い脚部を持つスキュフォス (高さ8.3cm、図24)、さらに三葉形の口縁部を持つ手びねりの水差し (もしくはオイノコエ、高さ9.9cm) である。

1970-15 (“5C”) 号墓

主要文献：*Asine* II:4-1, 16-19, 26-31.

他の文献：*Asine* II:1, 47, fig.41, 85-88, Lemos 2002, 22, 43, 76, 90, 112, 226, 232.

時 期：原幾何学文様期

1) 側壁の一部が礫で構築された箱形土棺墓 (図25)

北東—南西方向を主軸とし、内部の計測で52×19.5×23cmである。長い方の側壁は両方とも幅10cm前後の土製であるが、短い方は礫や小型の石で構築されていた。蓋は板状の石が使用されていた。

2) 土葬 (伸展葬)

少量の遺骨が出土した。おそらく早産で生まれた子供と推測され、貧血を患っていた。頭部は北東側に置かれていた。

3) 両足周辺から土器2個が出土した。水差し (高さ11.7cm、図26) と三葉形口縁部を持つ手びねりの水差し (もしくはオイノコエ、高さ12.8cm、図27) である。金属製品としては、右肩の上から鉄製フィブラ (長さ5.8m) が、左手が置かれていたと推測される場所からは鉄製指輪 (外側直径2.0cm、厚さ

0.3cm)が発見された(図28)。

また頭骨の後ろから穴が開けられたタカラ貝(cowrie shells)3個と小型の貝が幾つも発見された。さらに頭骨の正面からはネックレスのためのビーズ29個が出土しており、その内27個はファイアンス製の円盤状のものであった。

墓の外部においては北西側の長い側壁の外側から長さ20cm、幅3.5cmの粗製土器の破片が出土した。また南西端の石の上からはスキュフォス(高さ9cm)が押しつぶされた状態で発掘され、この墓と関係があると推測されている。さらに北西壁のすぐ外側から水差し(高さ8.8cm)が、南東壁から22cm離れた場所から別のスキュフォス(高さ8.3cm)が発見され、この墓と関連する遺物と見なされている。

1972-2 (I, H) 号墓

主要文献：*Asine* II:4-1, 9, 20, 22, 31.

他の文献：*Asine* II:1, 85.

時期：原幾何学文様期(もしくは幾何学文様期)か?⁸⁵

1) 土壙墓

北東—南西方向を主軸とし、正確な大きさは不明である。

2) 土葬(2遺体の合葬、両方とも伸展葬)

北側の遺体(I, H, 1 (68 As))は43歳の女性で、遺存状態が悪い。また別の遺骨より小さい。頭部は南西側に置かれており、顔は北を向いている。南側の遺骨(I, H, 1 (69 As))も遺存状態が悪く、被葬者は29歳の女性である。双方とも両腕を伸ばした伸展葬である。

3) 副葬品は出土しなかった。

1972-3 (I, J, 1) 号墓

主要文献：*Asine* II:4-1, 9, 20, 22, 31.

他の文献：*Asine* II:1, 46, fig.39, 85.

時期：原幾何学文様期(もしくは幾何学文様期)か?⁸⁶

1) 土壙墓

墓の大きさは不明である。主軸は東—西方向である。

2) 土葬(仰臥伸展葬)

頭骨は残存していなかったが、遺存状態が良好な遺骨が発掘された。被葬者は35歳の女性と報告されている。頭骨は東側に置かれていた。右手は胴体の傍らで伸ばされており、左手は骨盤の上に置かれていた。

3) 副葬品は発見されなかった。

- 1 2000年に刊行された文献に、スウェーデンおよびギリシアの調査隊により今まで18基が発掘されたと記されているが、それが墓域Ⅰのみでの数か、墓域Ⅱをも含めた数なのか、判然としない (*AD* 50, B'1, *Chronika 1995*, 2000, 103, n.36, 104)。ただし、ここで報告されている19号墓 (Οικόνεδο αδελφών Γρηγ. Νιώτη) が墓域Ⅰに属すると思われるので、墓域Ⅰのみの数でそれまでに18基発掘されていた可能性が高い。
- 2 墓域の概要に関しては、*Asine* I, 151-154, cf. Mountjoy 1996, 47.
- 3 *Asine* I の報告を補う文献として、Sjöberg 2004, chap.7. ただし元来記録が取られていない事柄に関しては、当然のことながら不明のままである。
- 4 Mountjoy 1999, 67, Sjöberg 2004, chap.7.
- 5 この墓の関連文献の詳細に関しては、cf. Takahashi 2009, 663.
- 6 Mountjoy 1996, 63-64.
- 7 この墓を造営した人々に関して「ほとんどトロス墓クラス」と表現している研究者も存在する (Hughes-Brock 1996, 70)。
- 8 玄室の主軸は北西—南東方向と記載されている (*Asine* I, 158)。不整形な上に羨道が二本あることも手伝って主軸を断定することは難しいが、北西—南東方向ではないように思う。
- 9 この墓の発掘報告 (*Asine* I) において、なぜ南側の羨道が新しく掘られたのかという点に関して二つの異なる意見が記載されており、調査関係者の間でも見解が分かれていたことがうかがわれる。北側の羨道が安全ではなくなったことから、南側に別の羨道が掘られたと推測する意見と (*Asine* I, 160)、北側の羨道が忘れ去られて、何世紀か後に新しく墓を造るために南側が掘られたところ、偶然にこの墓の玄室にぶつかったという意見とがある (*Asine* I, 356-357)。
 それのみならず、南側の羨道が新しいという報告書の見解に反する意見が提出されたこともある (Furumark 1944, 210, cf. Mountjoy 1996, 50)。この墓の資料を詳細に検討したマウントジョイは、北側の羨道が古く、おそらくそれが安全ではなくなったことから、南側が掘られたという解釈を提示している (Mountjoy 1996, 49, 62-63)。
- 10 *Asine* I, 158-159, Mountjoy 1996, 48. 北側の羨道の墓をL.H.12、南側の羨道の埋葬をL.H.10という名称で記載している文献として、*Asine* II:4-1, 21がある。また *Asine* II:4-1, 21ではL.H.10を土壙墓 (pit grave) と記しているのに対して、*Asine* I, 159 および Mountjoy 1996, 48では墓壙の存在を示唆する記述は見受けられない。
- 11 *Asine* I, 160.
- 12 *Asine* I, 161.
- 13 Furumark 1944, 210. Cf. Mountjoy 1996, 48, fig.1.
- 14 Mountjoy 1996, 56-57.
- 15 Mountjoy 1996, 56, 59.
- 16 Mountjoy 1996, 50, 64.
- 17 Mountjoy 1996, 64.
- 18 Hägg 1974, 49-51, *Asine* II:4-1, 21.
- 19 *Asine* I, 160. 追葬を行う際に灯りが必要だったとも考えられるのではないか。
- 20 Mountjoy 1996, 64-66. 筆者は以前にこの墓からは「後期青銅器時代IIB～亜ミケーネ期

にかけての土器が出土して」いると記したが（拙稿「アシネ」114）、原幾何学文様期の土器も出土していることを付け加えるとともに訂正しておきたい。

- 21 Cf. Gillis 1994, Hughes-Brock 1996, Beck 1996.
- 22 Hughes-Brock 1996, 74.
- 23 この墓の関連文献の詳細に関しては、cf. Takahashi 2009, 666.
- 24 *Asine* I, 162.
- 25 *Asine* I, 167.
- 26 *Asine* I, 167.
- 27 報告書では3個の石製容器（stone vessels）と50個の土器が報告されている（*Asine* I, 377-385）。ただし、土器が53個出土したと記載する文献もある（Sjöberg 2004, 98）。
- 28 象牙に関しては、cf. Krzyszkowska 1996.
- 29 Sjöberg 2004, 98-99.
- 30 *Asine* I, 165.
- 31 この墓の関連文献の詳細に関しては、cf. Takahashi 2009, 667.
- 32 *Asine* I, 173-174.
- 33 *Asine* I, 175.
- 34 この墓における埋葬は後期青銅器時代IIIC期における一回のみではないかと推測する意見がある（Sjöberg 2004, 100）。
- 35 Sjöberg 2004, 100.
- 36 この墓の関連文献の詳細に関しては、cf. Takahashi 2009, 668.
- 37 Furumark 1944, 198, Mountjoy 1999, 78, Sjöberg 2004, 101.
- 38 *Asine* I, 179, 398. これらの土器に関しては、Mountjoy 1999, 159, no.323, 170, no.359, 174, no.363. マウントジョイは後期青銅器時代IIIC期中期と判断している。
- 39 Sjöberg 2004, 101.
- 40 この墓の関連文献の詳細に関しては、cf. Takahashi 2009, 670.
- 41 *Asine* I, 182.
- 42 Sjöberg 2004, 101.
- 43 後期青銅器時代IIIA1期のものが1個、IIIA2期のものが2個、IIIC期のものが13個と記す文献がある（Sjöberg 2004, 101）。
- 44 Sjöberg 2004, 101.
- 45 この墓の関連文献の詳細に関しては、cf. Takahashi 2009, 671.
- 46 Mårtensson 2002.
- 47 Mårtensson 2002, 45.
- 48 *Asine* I, 421. Cf. Sjöberg 2004, 102.
- 49 *Asine* I, 186.
- 50 報告では墓域Iとは記載されていないが、筆者が文章からそのように判断した（*AD* 50, B'1, *Chronika* 1995, 2000, 103-104）。
- 51 報告では不整形な円形と記されているが、図面では台形状に見える（*AD* 50, B'1, *Chronika* 1995, 2000, 104, fig.4）。
- 52 *Asine* I, 189-192.
- 53 報告では墓域IIとは記載されていないが、筆者が文章からそのように判断した（*AD* 50,

- B'1, *Chronika 1995*, 2000, 103)。
- 54 AD 50, B'1, *Chronika 1995*, 2000, 103. ただし平面図では円形のようには見えない (AD 50, B'1, *Chronika 1995*, 2000, 104, fig.3)。
- 55 AD 50, B'1, *Chronika 1995*, 2000, 103. 墓壇1の2体の遺骨について、かつて筆者は双方が後期青銅器時代IIIA1期の埋葬であり、IIIC期に入ってから何らかの理由で土器のみが埋納されたと考えていた (cf. Takahashi 2009, 674)。しかしIIIA期に最初の遺骸が葬られたあと、IIIC期になって再び埋葬が行われた可能性も否定できないと言えよう。
- 56 バルブナの横穴墓の副葬品であった可能性が高いと思われるので、この項目に記載することとする。
- 57 *Boreas* 4:4, 43-49, Mountjoy 1999, 67.
- 58 この調査区の墓に関する詳細な関連文献に関しては、cf. Takahashi 2009, 678-699.
- 59 *Asine* I, 130, fig.111A.
- 60 “left arm bent with the hand above the hip” (*Asine* I, 132).
- 61 *Asine* II:4-1, 21.
- 62 発掘報告では水差し (jug) と記載されているが (*Asine* I, 428, Tomb P.G.18, no.2)、レモスはレキュトスと判断している (Lemos 2002, 74)。高さから考えて、レキュトスの方が適切であろう。
- 63 *Asine* I, 425.
- 64 *Asine* I, 425.
- 65 *Asine* I, 425.
- 66 水差し (jug) と報告されたが (*Asine* I, 431, Tomb P.G.27, no.2)、むしろレキュトスであろう (Lemos 2002, 74)。
- 67 *Asine* I, 135, 425.
- 68 形は “oblong” と記載されている (*Asine* I, 136)。
- 69 “Cenotaph?” と記載されている (*Asine* I, 136)。
- 70 *Asine* II:4-1, 21.
- 71 一部が39号墓の下に位置している。私見ではおそらくそれが理由ではないと思われるが、後期青銅器時代の可能性が記載されている (*Asine* I, 139)。
- 72 Cf. *Asine* I, 129, Hägg 1965, 117. この項目の墓2基の関連文献に関する詳細は、cf. Takahashi 2009, 699. またそこでは “Τάφοι στα Βορειοανατολικά του Λόφου της Μπαρμπούνας” と記されているが、“Νοτιοανατολικά” の間違いである。
- 73 Hägg & Nordquist 1992.
- 74 この墓の他の関連文献に関しては、cf. Takahashi 2009, 675.
- 75 *Boreas* 4:1, 38, fig.18, 39, fig.19.
- 76 *Boreas* 4:2, 93, 107.
- 77 この墓の他の関連文献に関しては、cf. Takahashi 2009, 676.
- 78 この墓の他の関連文献に関しては、cf. Takahashi 2009, 676.
- 79 *Boreas* 4:2, 114.
- 80 *Boreas* 4:1, 74.
- 81 この項目における墓の関連文献の詳細に関しては、Takahashi 2009, 700-705.
- 82 頭部は西側に置かれていたことを考えると、むしろ南南西—北北東方向と記す方が適切

かもしれない。

- 83 報告には北側と西側が粘土や礫、石などを固めた壁と記載されているが、図面で見ると北側と東側である (*Asine* II:4-1, 12, fig.6)。
- 84 原幾何学文様期の可能性が最も高いという記載 (*Asine* II:4-1, 9) と、原幾何学文様期もしくは幾何学文様期双方の可能性を推測する記載 (*Asine* II:1, 85) の両方がある。
- 85 原幾何学文様期の可能性が最も高いという記載 (*Asine* II:4-1, 9) と、原幾何学文様期もしくは幾何学文様期双方の可能性を推測する記載 (*Asine* II:1, 85) の両方がある。
- 86 原幾何学文様期の可能性が最も高いという記載 (*Asine* II:4-1, 9) と、原幾何学文様期もしくは幾何学文様期双方の可能性を推測する記載 (*Asine* II:1, 85) の両方がある。

略記一覧

Asine I

O. Frödin & A. W. Persson, *Asine: Results of the Swedish Excavations 1922-1930*, Stockholm, 1938.

Asine II:1

S. Dietz, *Asine II: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974*, Fasc.1: *General Stratigraphical Analysis and Architectural Remains*, Stockholm, 1982.

Asine II:4-1

B. Wells, *Asine II: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974*, Fasc.4: *The Protogeometric Period*, Part 1: *The Tombs*, Stockholm, 1976.

Asine II:4-3

B. Wells, *Asine II: Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974*, Fasc.4: *The Protogeometric Period*, Part 3: *Catalogue of Pottery and Other Artefacts*, 1983.

Asine III

R. Hägg, G. C. Nordquist & B. Wells eds., *Asine III: Supplementary Studies on the Swedish Excavations 1922-1930*, Stockholm, 1996.

Boreas 4:1

I. Hägg, R. Hägg & D. Bannert, *Excavations in the Barbouna Area at Asine*, Fascicle 1: *General Introduction, Bibliography, Geological Background and a Report on the Field-work in the Levendis Sector, 1970-72*, Boreas 4:1, Uppsala, 1973.

Boreas 4:2

Y. Backe-Forsberg, J. M. Fossey, B. Frizell & R. Hägg, *Excavations in the Barbouna Area at Asine*, Fascicle 2: *Finds from the Levendis Sector, 1970-72*, Boreas 4:2, Uppsala, 1978.

Boreas 4:4

I. Hägg & J. M. Fossey, *Excavations in the Barbouna Area at Asine*, Fascicle 4: *The Hellenistic Nekropolis and Later Structures on the Middle Slopes, 1973-77*, Boreas 4:4, Uppsala, 1980.

文献一覧

- Backe-Forsberg, Y. & C. Risberg 2002: Archaeometallurgical Methods Applied to Remains of Iron Production from the Geometric Period at Asine, in Wells ed. 2002, 85-94.
- Beck, C. W. 1996: Spectroscopic Identification of “Amber” and “Black Resin” from Asine, in *Asine* III, 91-92.
- Cavanagh, W. & C. Mee 1978: The Re-Use of Earlier Tombs in the LH IIIC Period, *BSA* 73, 31-44.
- Frödin, O. & A. W. Persson 1925: Rapport préliminaire sur les fouilles d’Asiné, 1922-1924, *Årsberättelse 1924-1925: Bulletin de la société royale des lettres de Lund 1924-1925*, Fasc.II, 23-93.
- Furumark, A. 1944: The Mycenaean IIIC Pottery and its Relation to Cypriote Fabrics, *Opuscula Archaeologica* 3, 194-265.
- Gillis, C. 1994: Binding Evidence: Tin Foil and Organic Binders on Aegean Late Bronze Age Pottery, *Opuscula Atheniensia* 20, 57-61.
- 1996: Tin at Asine, in *Asine* III, 93-100.
- Hägg, R. 1965: Geometrische Gräber von Asine, *Opuscula Atheniensia* 6, 117-138.
- 1971: Protogeometrische und Geometrische Keramik in Nauplion, *Opuscula Atheniensia* 10, 41-52.
- 1974: *Die Gräber der Argolis: in submykenischer, protogeometrischer und geometrischer Zeit*, 1. *Lage und Form der Gräber*, Uppsala.
- Hägg, R. & G. C. Nordquist 1992: Excavations in the Lvendis Sector at Asine, 1989, *Opuscula Atheniensia* 19, 59-68.
- Hughes-Brock, H. 1996: Asine Chamber Tomb I.1. The Small Finds, in *Asine* III, 69-80.
- Kilian-Dirlmeier, I. 1984: *Nadeln der frühhelladischen bis archaischen Zeit von der Peloponnes*, Prähistorische Bronzefunde XIII:8, München.
- Krzyszowska, O. H. 1996: Asine Chamber Tomb I:2: The Ivories, in *Asine* III, 81- 90.
- Lemos, I. 2002: *The Protogeometric Aegean: The Archaeology of the Late Eleventh and Tenth Centuries BC*, Oxford.
- Lindblom, M., G. Nordquist & H. Mommsen 2018: Two Early Helladic II Terracotta Rollers from Asine and their Glyptic Context, *Opuscula* 11, 81-96.
- Macheridis, S. 2017a: Centralization at Asine during the Bronze Age from a Zooarchaeological Perspective, *Mediterranean Archaeology and Archaeometry* 17(2), 159-174.
- 2017b: Symbolic Connotations of Animals at Early Middle Helladic Asine: A Comparative Study of the Animal Bones from the Settlement and its Graves, *Opuscula* 10, 128-152.
- 2018: *Waste Management, Animals and Society: A Social Zooarchaeological Study of Bronze Age Asine*, Acta Archaeologica Lundensia Series altera in 8°, no 69, Studies in Osteology 3, Lund
- Mårtensson, L. 2002: Traces of Boxes: Linings of Wooden Boxes in Helladic Tombs, in Wells ed. 2002, 43-48.

- Mountjoy, P. A. 1996: Asine Chamber Tomb I: The Pottery, in *Asine* III, 47-67.
 ——— 1999: *Regional Mycenaean Decorated Pottery*, Rahden.
- Persson, A. W. 1923: Aperçu provisoire des résultats obtenus au cours des fouilles d'Asiné faites en 1922, *Årsberättelse 1922-1923: Bulletin de la société royale des lettres de Lund 1922-1923*, 25-42.
- Sjöberg, B. L. 2002: Economic Interaction on the Argive Plain. A Research Note on Late Helladic Asine, in Wells ed. 2002, 57-69.
 ——— 2004: *Asine and the Argolid in the Late Helladic III Period: A Socio-economic Study*, BAR International Series 1225, Oxford.
- Takahashi, Y. 2009: *Τα Έθιμα Ταφής στην Αργολίδα: Από την Μετανακτορική έως και την Πρωτογεωμετρική Περίοδο*, Ph.D thesis, National and Kapodistrian University of Athens.
- Wells, B. ed. 2002: *New Research on Old Material from Asine and Berbati: in Celebration of the Fiftieth Anniversary of the Swedish Institute at Athens*, Stockholm.
- Yioutsos, N. -P. 2017: The Last Occupation of Asine in Argolis, *Opuscula* 10, 164-189.

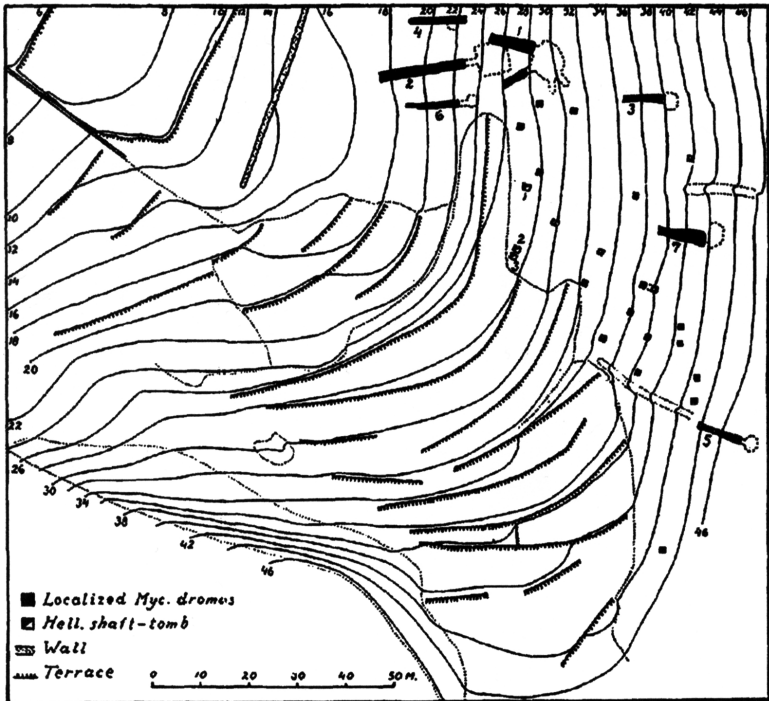


図2 墓域 I 全体図 (出典: *Asine* I, 152, fig.131)

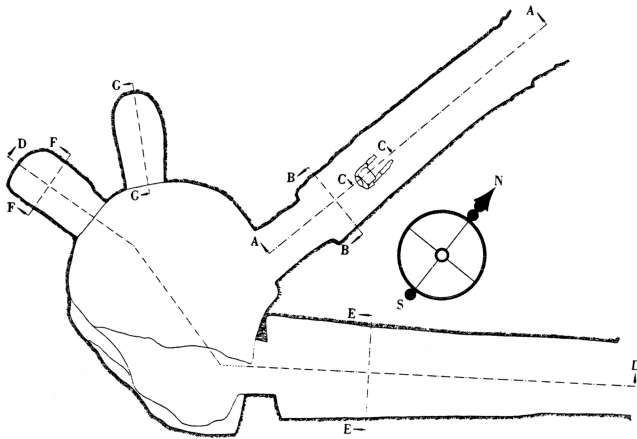


図3 墓域 I の 1号墓平面図 (出典: *Asine I*, 156, fig.134)

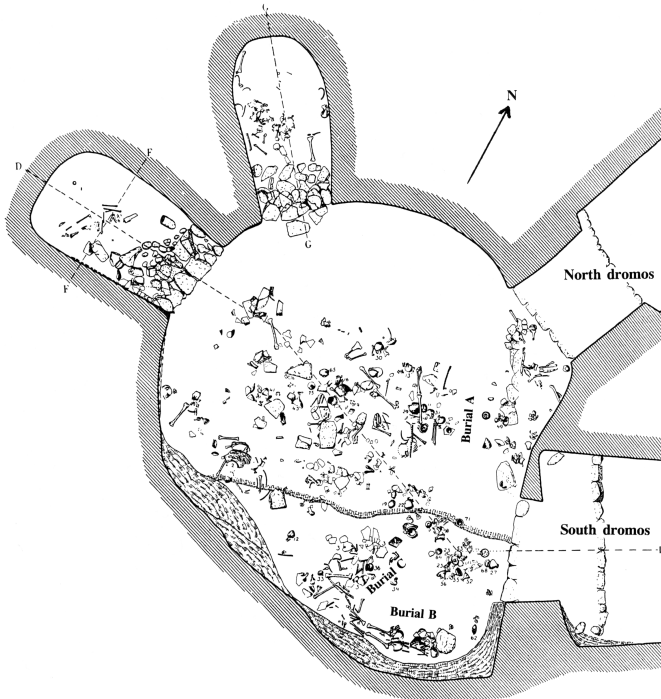


図4 墓域 I の 1号墓玄室平面図 (出典: *Mountjoy 1996*, 48, fig.1)



図5 墓域Iの1号墓出土の後期青銅器時代IIIC期のアンフォリスコス
(高さ17.2-17.7cm、出典：Mountjoy 1996, 57, fig.9:4)

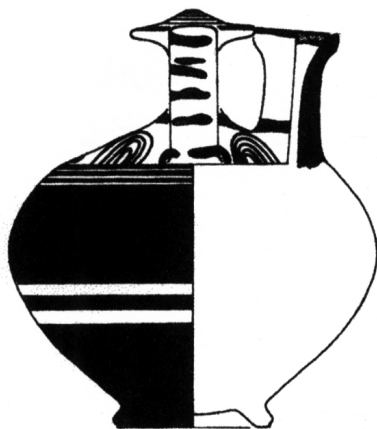


図6 墓域Iの1号墓出土の壺ミケーネ期の鏡壺
(高さ13.2cm、出典：Mountjoy 1996, 62, fig.13)

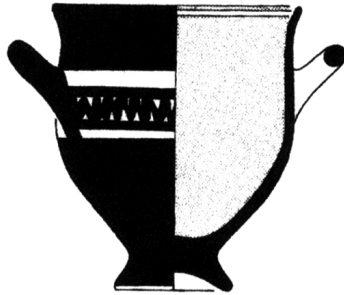


図7 墓域 I の 1 号墓出土の原幾何学文様期のスキュフォス
(高さ8.9-9.1cm、出典：Mountjoy 1996, 62, fig.14)

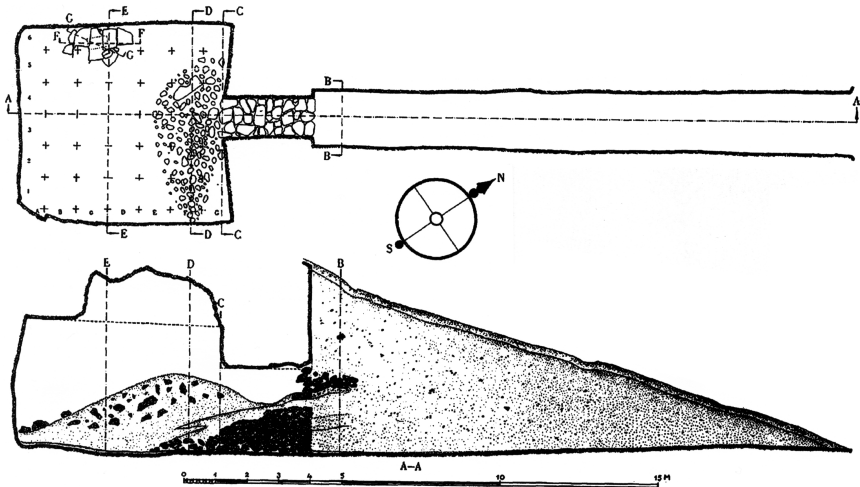


図8 墓域 I の 2 号墓平面図 (上) と断面図 (下) (出典：Asine I, 164, fig.139)

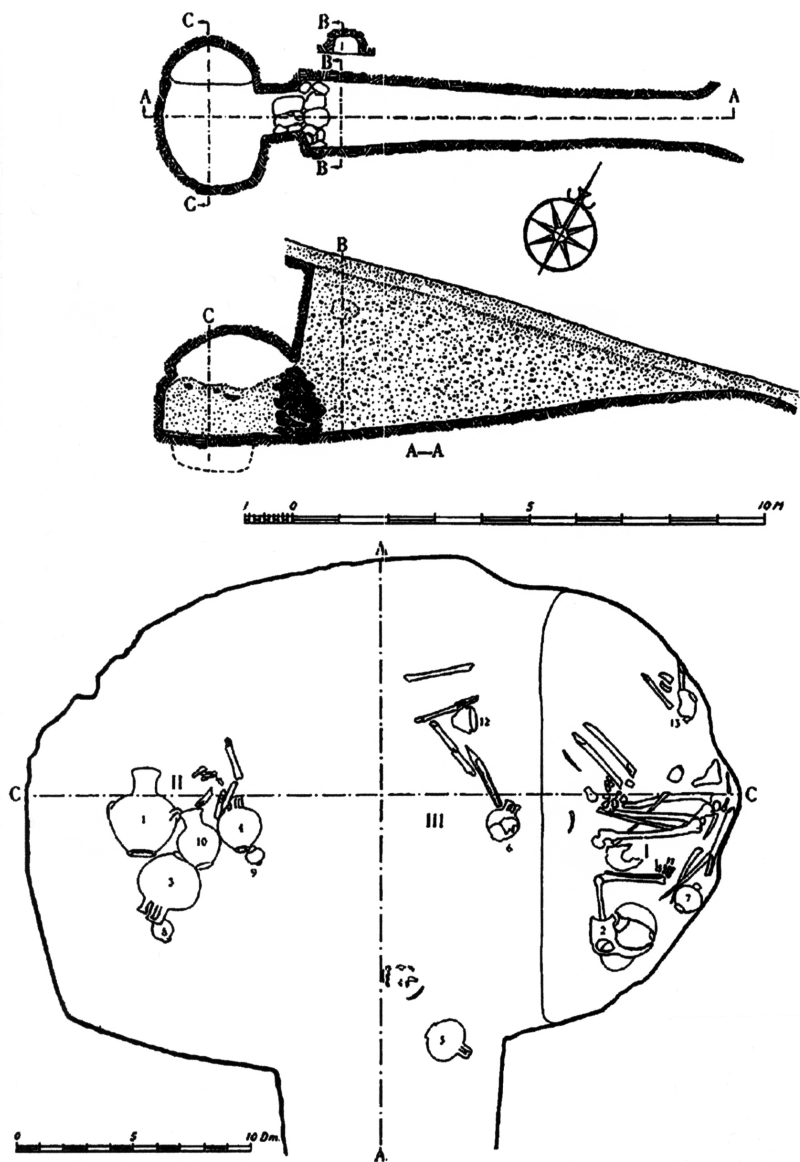


図9 墓域Iの5号墓平面図(上)、断面図(中)、玄室平面図(下)
(出典: *Asine I*, 176, fig.144)

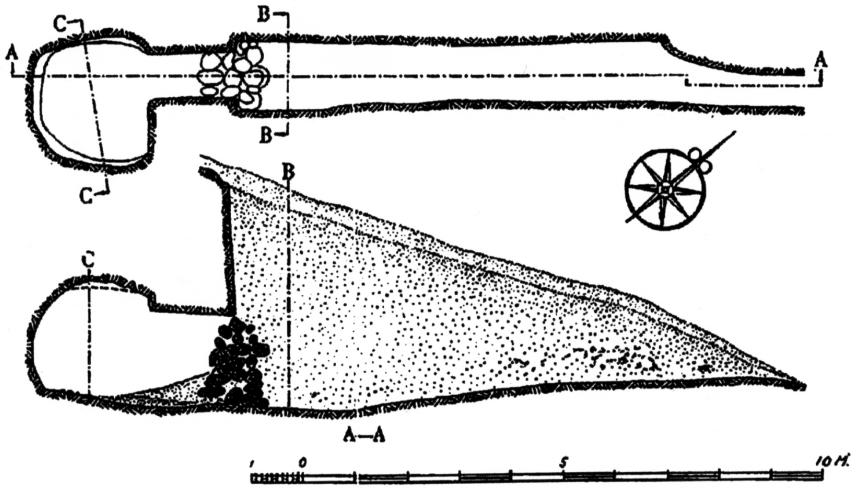


図10 墓域 I の 6 号墓平面図 (上) と断面図 (下) (出典 : *Asine I*, 180, fig.145)

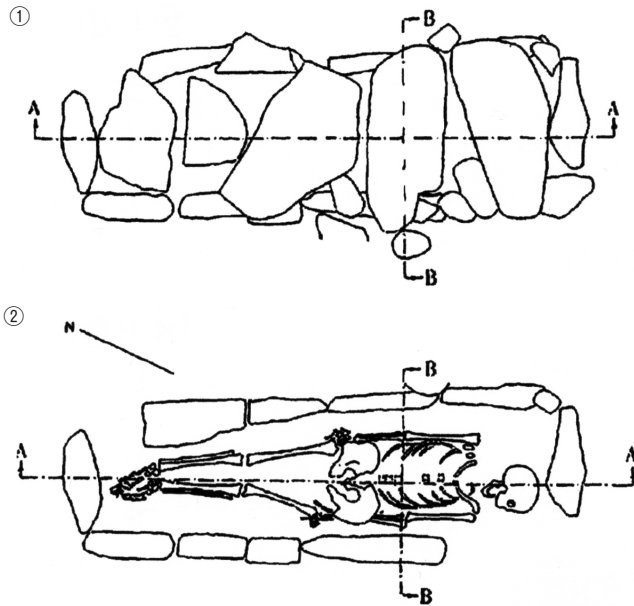


図11 P.G.11号墓の蓋石で覆われた状態の平面図 (①) と蓋石がはずされた状態の平面図 (②)
(出典 : *Asine I*, 131, fig.113)

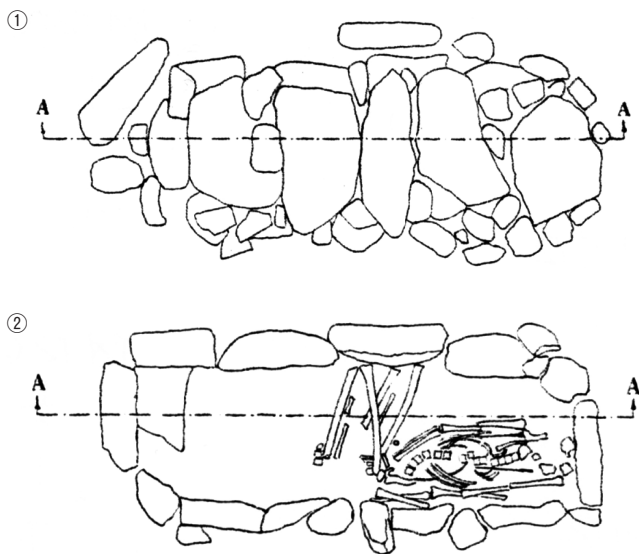


図12 P.G.12号墓の蓋石で覆われた状態の平面図(①)と蓋石がはずされた状態の平面図(②)
(出典: *Asine I*, 132, fig.114)

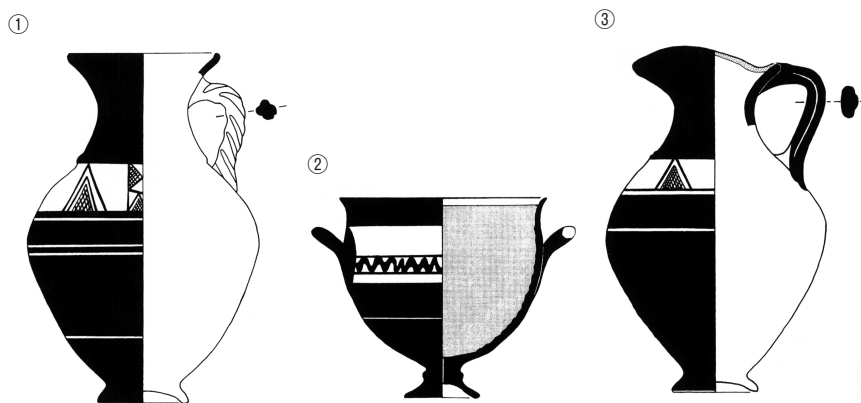


図13 P.G.25号墓出土の水差し(①)、スキュフォス(②)、オイノコエ(③)
(出典: *Lemos 2002*, pl.28:1-3)

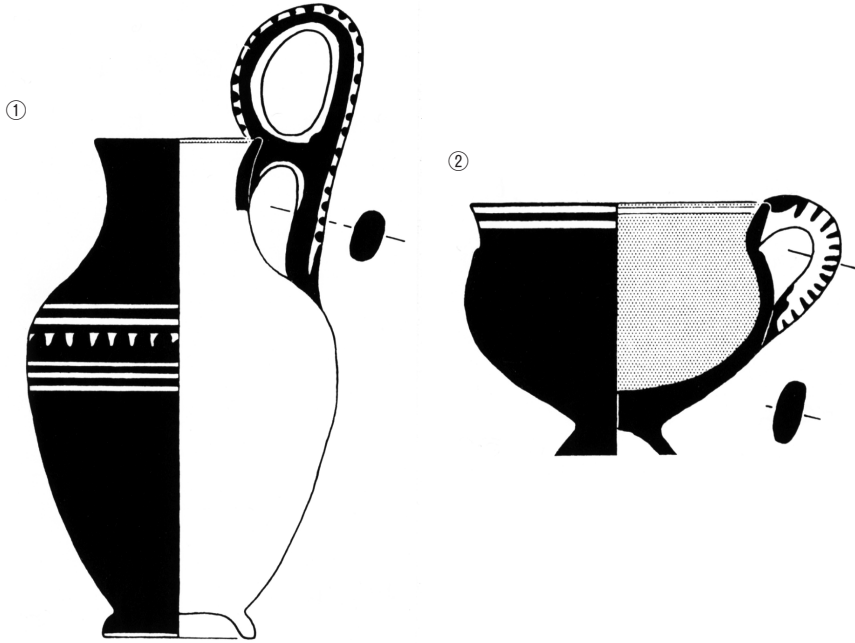


図14 P.G.26号墓出土の水差し(①)とカップ(②) (出典: Lemos 2002, pl.55:1-2)

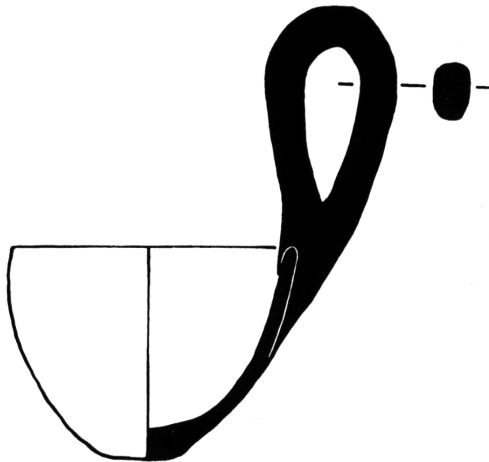


図15 P.G.35号墓出土のひしゃく状土器 (出典: Lemos 2002, pl.100:6)

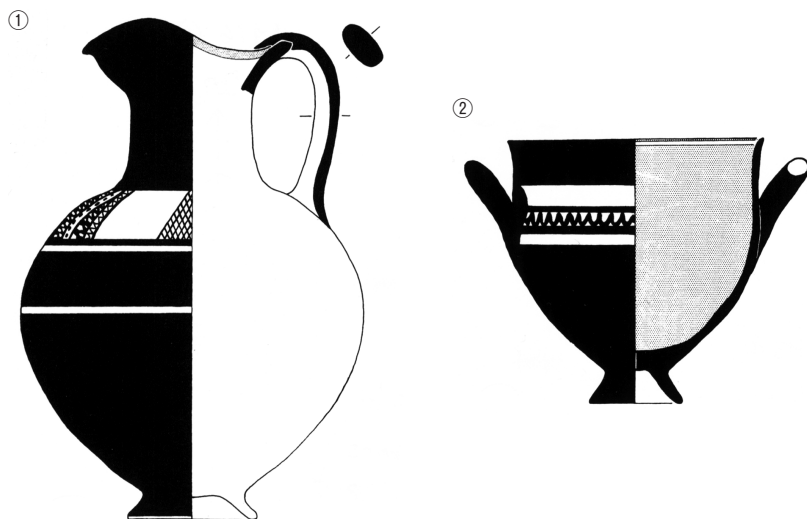


図16 P.G.47号墓出土のオイノコエ (①) とスキュフォス (②)
(出典: Lemos 2002, pl.28:4-5)

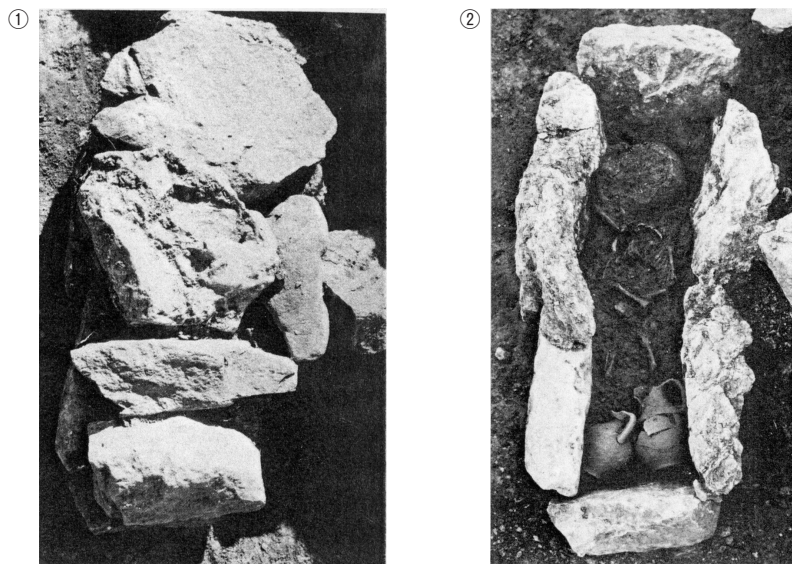


図17 B9号墓の蓋石で覆われた状態 (①) と蓋石がはずされた状態 (②)
(出典: Boreas 4:1, 78, fig.80-81)

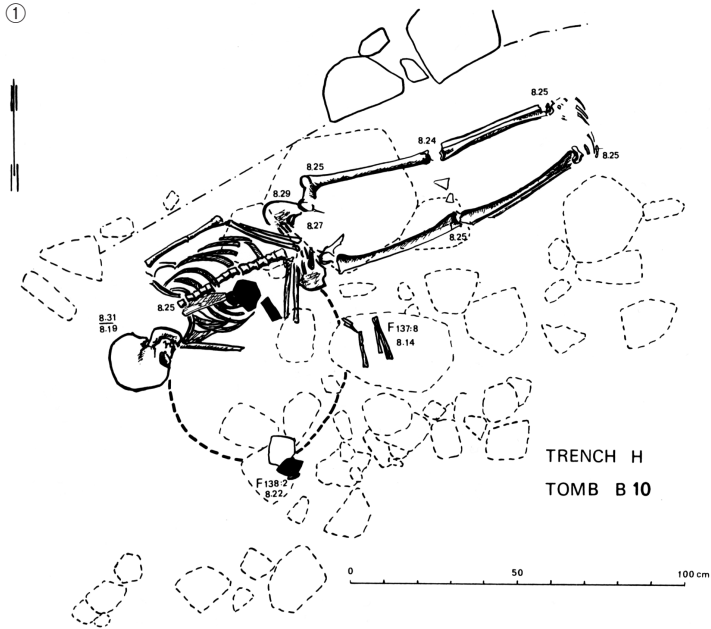


図18 B10号墓の平面図 (①) と北東側からの写真 (②) (写真 (②) で遺骸の右側にある石壁は墓とは別個の遺構 (stone wall A 72.38)、出典 : Boreas 4:1, 73, fig.70, 75, fig.74)

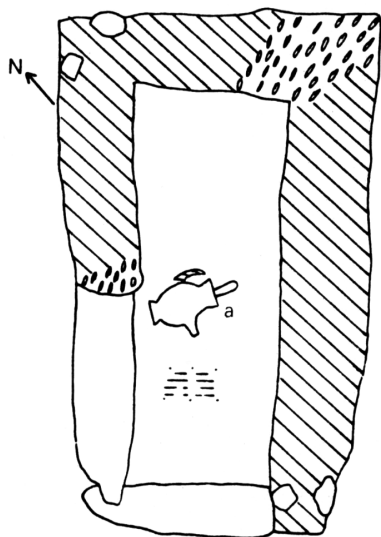


図19 1970-9号墓の平面図
(斜線部分は粘土、礫、石が固められて構築された壁、出典：Asine II:4-1, 12, fig.6)

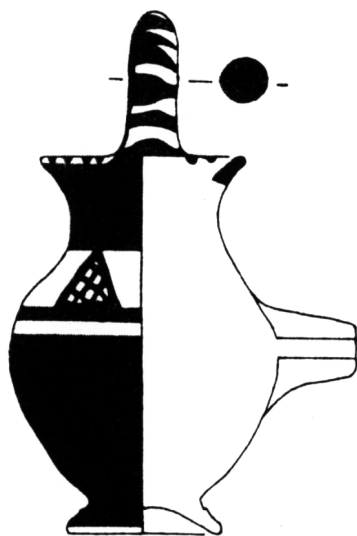


図20 1970-9号墓出土の注口のある水差し
(出典：Asine II:4-1, 27, fig.33e)

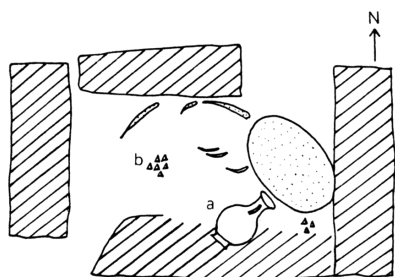


図21 1970-10号墓の平面図
(斜線部分は土製壁、出典：Asine II:4-1, 13, fig.9)



図22 1970-10号墓出土のレキュトス
(出典：Asine II:4-1, 27, fig.33f)

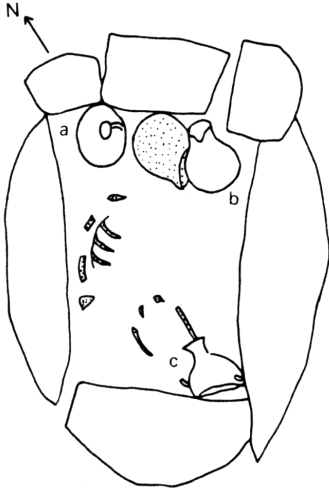


図23 1970-14号墓の平面図
(出典: *Asine* II:4-1, 14, fig.14)



図24 1970-14号墓出土のスキュフォス
(出典: *Lemos* 2002, pl.69:2)

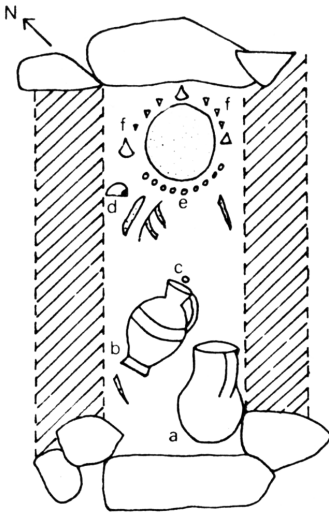


図25 1970-15号墓の平面図
(斜線部分は土製壁、
出典: *Asine* II:4-1, 16, fig.19)

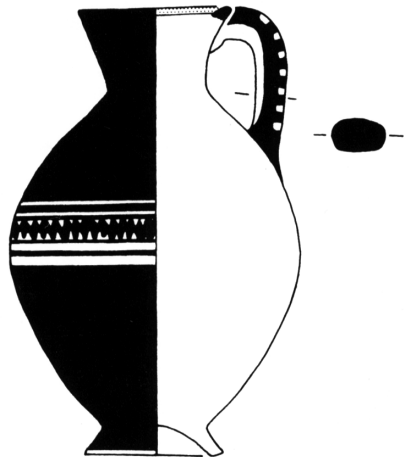


図26 1970-15号墓内部から出土した水差し
(出典: *Lemos* 2002, pl.95:5)

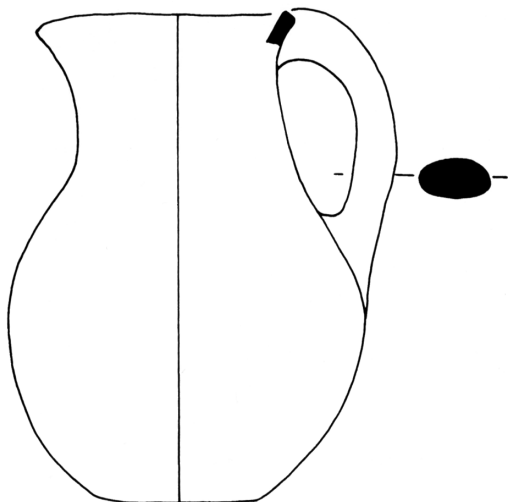


図27 1970-15号墓内部から出土した手びねりの水差し
(出典：Lemos 2002, pl.101:2)

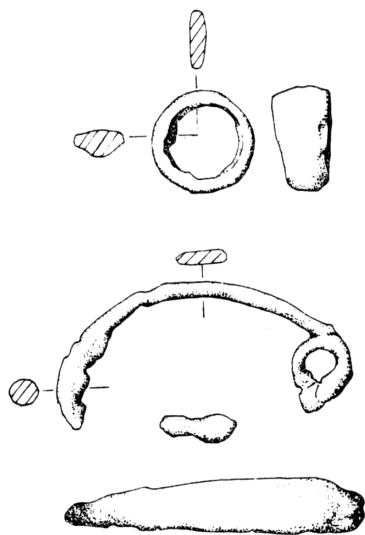


図28 1970-15号墓出土の鉄製指輪（上）と鉄製フィブラ（下）
(出典：Asine II:4-1, 18, fig.25)

